
空白の1年 想う

mine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白の1年 想つ

【ZPDF】

20185W

【作者名】

mine

【あらすじ】

「…俺が、変わっちまつたんだよ。多分な。」

1年という時を経て、元に戻った新一。そして新たに転入した少女と、平和な日々を過ごす……そつなろうとしていた筈だった。

『その時までは

優しさが全てを壊し、粉々に砕け散る。

対象への憎しみと怒りに包まれる蘭。

疲れ果て、気力を完全に失った志保。

自分自身のせいだと、理解しながらもどうしてやる事も出来ない新
一。

それでも、お互に理解し合わなければ 人は前へと進めない。新
志。

リメイク小説。少しストーリーも方向性を転換させていますが、
大筋は同じです。

1 少女達の思惑（前書き）

久々の新志の感覚で書いてきます。不自然な点などあれば、なんなりと。

1 少女達の思惑

「 成功よ。工藤君……お疲れ様。」
彼女の声が耳元に響くと、ベッドに横になっていた青年はようやく一息ついて立ち上がった。

「 ん~つ……よつと。」

ポンポンと、感触を確かめるようにフローリングの床の上を飛び跳ねてみる。

「 お~つ……」

準備運動の真似事をするように屈伸してみると、久々に強く足元が踏み締められるのが青年には良くなかった。

「 ふう……サンキューな、灰原。」

少女の元に近寄り、笑顔で礼を告げると、その少女は横を向いた。

「 礼なら要らないわ。私は当然の事をしたまで……それより、あなたは約束守りなさいよ。体調に異変が生じたら、すぐに報せる事怠つたら、死ぬわよ?」

「 わーつてるつて…… 痛つて!」

『ゴン』という変な響きと共に、頭を抱える新一。

「 何すんだ、てめつ……」

「 全然分かつてないでしょ?から、一発拳骨入れといったの。悪い?」

「 悪いとか……そういう問題じゃ……」

「 全く……もし解毒剤が未完成で、あなたが突然元に戻つたらどうするの?蘭さんの前で、誤魔化しきれる?」

だが、新一は灰原の予想外の反応を見せた。

「…へえ。」

「え？」

てっきり言葉に詰まるものだと思っていた灰原は、思わず首を傾げた。

「いや、少なくとも…オマーが、失敗作作ると思つてねえし。」

「…何それ。信頼してるの？それとも寝惚けてるの？」

逆に、今度は新一が言葉を詰まらせる。

「つたく…どつちよ。」

「さあ…どつちでも。お前の好きな方で　さてと、俺は久々に家に戻つか…多分昂さんが家空けといてくれてるだろうしな…」

ようやく一年という時を経て、組織は壊滅した。長く長く続いた小学一年生としての生活も終わりを告げ、学年が上がると同時に1-Bの仲間達に別れを告げ、『江戸川コナン』は解毒剤で『工藤新一』へと戻る事に成功したのである。

「それにしても、学校の方、大丈夫なの？あなた1年間休んでたんでしょう？」

「ああ…まあ、適当に何とかするわ。居残りとかで…それより

その瞬間、『しまった』と心中で灰原は舌打ちした。

「お前、元に戻らねえのか？」

(ほら見なさい…大方の予想通りの質問じゃない。)

小さく溜息をついて、灰原は答えた。

「…まあ。」

答える予定の言葉が喉元でつつかえて出てこないのが分かった。

『戻る意味なんて無い』といつ言葉の代わりに、誤魔化すような言葉を選んで紡いでいく。

「私、特にやる事無いし。気が向いたら戻るんじゃない？」

「…戻った方が、良いと思つぜ？」

「どうして？」

数秒沈黙を挟む。新一は顎に指を置いて考えていたが、お手上げだったようだ、腕を軽く上に上げた。

「まあ…どうしてだらうな。お前みたいに適当に言つたら『元の姿のお前を間近で見てみたい』。」

「エッチ。」

「何がだよー！」

クスッと笑つて、灰原は新一に背中を向けた。

「考えておくわ。」

新一は、『ナンの時のように』「可愛くねー奴」といつ台詞を残して、扉が閉まつた。

『戻る意味なんて無い』

それは、単純に本音を封印しているだけ 灰原は分かっていた。

1年間で、全てがガラリと変わってしまった。

小学1年生として過ごした間、周りの人間との関わりが、少しずつ自分の黒く染められた心を白で解き解していく。

そして、その中心にはいつも『彼』が居た。絶体絶命の時、自分自身が絶望に染まった時……

自らバスの中で死のうとした自分自身を、助け出してくれた『彼』が、今では永遠に感謝したくなるほどの存在に思えてくる。

あそこで死んでいれば……何も感じる事無く、死んでいただろう、と。

灰原哀。自分自身に名付けた名前。

「灰」は黒を白で溶かした色。普通なら逆だが、灰原にとってはそういう色。

自分自身が、自然とそつなつて…白くはなりきれない、けれどもつ黒じやない。

『そこまで綺麗になれたのは、何故だろ？』灰原は考える。
：その中心に、彼が居た。必ず、彼が居た。

止まらない感情があつて、どうしようもなくて。
けれど、自分でそれを表現する事は出来なくて。

そもそも、彼には待っていた人が居る…けれど、灰原自身にだつて
プライドがある。
だから、迷う。何処までも。

何より戻つたら、周りの存在に大きな損害を与える事が怖い。
けれど、それでも戻りたい。戻つて…工藤新一に言つ事を言いた
い。

渦巻く感情が、机に座り、キーボードに手を滑らせる灰原を苛立
たせた。

（…私は、どうしたらいいのよ。）

1年
か。

新一の家を掃除する度に、蘭はいつも思つ。

『何の事件に関わっているの?』

今日に僅かな期待を抱いて、蘭は新一の家を掃除していた。彼と入れ替わるようにやつてきた少年、『江戸川コナン』が海外へと帰つてしまつた事にそれはあつた。

(新一と、コナン君は同一人物じゃない…けれど。)

あの不自然な入れ替わりを考えると、今回は逆に新一が戻ってくる

んじやないかと、僅かに蘭は期待した。

（「コナン君が居てくれた間…凄く楽しかったな…新一もこれで一緒に居たら面白いのに…」）

とはいって、不自然な点が最後に残つた。コナンがやけに真剣に小五郎と話をしていた事…それが僅かに蘭には気に掛かっていた。

（ま、コナン君は大人っぽいし…何か推理の事でも話してたのかな。）

取り敢えず、そう思つてやり過ごしていた。

ふと、自分が恋した青年の事を想う。

『「イマ、アナタハドコデナニヲシテイルノ?』

何度も頭の中で問いかけても、答えが返つて来る事は決して無い。

もし、今日戻つてくる事が無くとも、私は待ち続けよう そう思つて、日々をやり過ごす。

その内辛くなるかもしれない…けれど、辛いのはきっと私だけじゃない、いつか戻ってきた時、嬉しくなれる そう思つて日々をやり過ごす。

限界はあると知りながらも、蘭は心に決めていた。必ず、待ち続ける。

「…桜。」

散り始めた外の桜並木。4月上旬、高校3年生となる姿を見せない

青年と自分。

「…新一、早く戻ってきてね。」

静かに呴いて、蘭は家を後にした。

「…え、…？」

ドアを開いた瞬間のその光景に、蘭は思わず啞然とする。

「新
一
…?
」

二人の間の時間だけが凍結した。

2 温度差以上の違和感

「新一……なの……？」

ドアを放り開け、少女はゆっくりと一歩田を踏み出した。

「本当に……？」

驚きの余り動かなくなる新一へと、また一歩を踏み出ると、足元に何かが零れ落ちる。

「あ、ははっ……ちよつと、事件、長引こちまつて……」

少し苦笑いして、蘭に説明すると、蘭は立ち止まってまた何かを零した。

「……そう、……」
「……ひ、ん……？」

右腕で瞳を拭うと、蘭は真正面に立つ新一の方向を向いた。

「バカアツー、ビーハー、どうして！？ 何してたのよおつ！？」
泣き叫びながら、蘭は飛びついてきて場所なんかお構いなしに新一を抱き締める。

新一が事件に巻き込まれると分かっていながら、どうにもしてや

れなかつた、何も手伝つてあげられなかつた悔しさ。
しかし、その青年は無事に今日の前に居るといつ事。実在する、
その青年の姿。

『待つことで感じられる嬉しさ』

「ちょつ…」

「バカツ！バカツ！…ずつと、つ、ずつと、心配してたんだから
つ…！」

「……『めん。』

「バカツ！…バカツ！」

新一がゆつくりと蘭の背中を摩ると、蘭も少しずつ涙を抑え込んで
いく。

「…落ち着いたか？」

「馬鹿。大馬鹿推理之助。大馬鹿推理野郎。」

（どつちも同じじやねえか…）「…もつ大丈夫だな。」

瞳に涙を浮かべながら、ようやく蘭は顔を上げた。

「…悪いな。散々…待たせちまつて。」「……良いよ。戻ってきて
くれたもん。…もつ」

一呼吸空けて、蘭は言った。
「もう…行かないんでしょ？」

「ああ。」

途端に、蘭の顔に笑顔が戻った。

「 かーたー ！

卷之三

思わず、もう一度蘭は新一を抱き締めた。

「お帰り。新一。」

「「一ヒーで良いよな……よつと。」

新一は、「一ヒーのカップを蘭の席の前へと置く。
「ありがとう。」

一口すすると、蘭は尋ねた。

「ねえ、新一。大丈夫？一年分の休学、取り戻せるの？」
「さあ……大丈夫なんじゃねえの。居残りとかで……」

「ノート貸そつか？」

「大丈夫だろ……多分。」

少し不機嫌そうな表情をする。

「そ……ま、新一なら見せて貰うだけ無駄よね。」

「別に……そこまで言つてねえだろ。」

僅かな沈黙を挟み、二人は軽く笑つた。

「冗談よ。でも、必要な時は言つてね？音楽……とか。」

「へーへー……つと、それより蘭。お前おつちゃんと「コナンの夕食、作んなくて大丈夫なのか？」

わざと、新一は「コナン」という存在を持ち出した。

「あ、いっけな……買い物しようとしてたんだっけ……ま、遅くなつてもいいか……そうそう、それとコナン君、もう外国に帰つちゃつた

の。」

「へー…」

懐かしそうに、蘭が記憶を巡らせていく。
「新一と一緒にだったら…面白かったのにな。推理馬鹿同士、息も合
うと思つ…」

（……逆効果だつたかな。）

「そうだ、新一は『ナン君の連絡先、知つてる?』
「え?」

思わぬ言葉に、新一は驚いて反応する。

「手紙。書いたら届けてくれない?
「あ、ああ…別に、構わねえけど。」
「それじゃ、お願ひね 私、買い物行つてくるから…また、明日ね
つ…」

元気に蘭は立ち上がり、コーヒーのカップをさつと洗うと、すぐに
家を出て行つた。

「寝坊しないでよー起こしに行くナゾ、30分起きなかつたら無視
するよ!」

「あー…」（なんであんな大きな声で30分眠れるんだ、つづーの
…）

新一は溜息をつきながらも、戻つてくる口常じふと思いを馳せた。

高校生活。元の身体で過ごした時間が懐かしい。

蘭だけじゃなく、色々な人間と関わりあって、過ごした時間。

…休み時間はサッカーしたり、授業中にこいつそりと推理小説を読み漁つたりと（大体は眠っているのだが）。

（…ま、残り1年だし、去年の分取り戻すとなるとあんまりゆっくりは出来ねえけど。）

それでも、色々な人間と 関われる事。それが、幸せだった。
今は江戸川コナンとして関わった人間が愛おしいけれど、それと同様に江戸川コナンの間は工藤新一として関わった人間が愛おしかった。

（…よつやく、会えるんだよな。）

戻ってきた世界。元に戻つて、よつやく元の生活が戻つてくれる。
ただ、もし一つ新一に違和感があるとすれば

~~~~~

駆け出していた蘭は、しばらくして立ち止った。

(私が…可笑しい、のかな…?)

ようやく会えて、何倍にも増した筈の嬉しさが、何故か薄れて感じられる事。

いや、自分自身はかなり嬉しいと思っている。だが、新一の様子を見て、その嬉しさが膨らまなかつたのだと、蘭は推測した。

『待つのは…辛くなんかない』  
強がりなんかじやない。そう蘭は言い切つていた…筈だ。

(……考えすぎかな。)

深呼吸を一度して、春の空気を大きく吸い込む。

(…やうだよ…新一だつて疲れてるんだし…それに、楽しい時間は…明日からなんだもの。)

ようやく、新一と久々に学校に行ける 明日を待ち遠しく思いながら、蘭は商店街へと歩き出した。

### 3 戻ったはずの口算

「つたく…遅いよ。新一。遅刻しちゃつじやない…」  
待ちくたびれた様子で息をつく蘭。

「うつせーな…」

学生鞄を肩に掛け、寝惚けた表情のまま口こくわえた最後の一 口のパンを飲み込み、門を開く新一。

桜舞い散る春の風。ようやく帰つて来た青年の隣を、歩く事が出来るという素晴らしい時間が、蘭を待つていた。  
(…本当に、新一…なんだ…！)

「おーい、蘭。早く行くんじゃねえのか?  
数歩遅れた蘭の方を新一は振り向いた。

「あ、うんー」めん。

慌てて駆け寄る蘭。その時だった。

「あつ…哀ちゃん!」  
「灰原じゃねえか…」  
「蘭さん。新一さん。」

光彦の家の前で、インターフォンを鳴らして出て来るのを待つ少女

の姿がそこにはあった。

「どうした?」

「ええ……ちょっと、円谷君を待つてて。」

「珍しいな……お前、いつもわざわざと行つちまつじやねえか。」

「……」

「どうした? 何か用事でも」

「新一?」

蘭が新一の背後から不可解な声を発した。

(やべつ……なんかマズい事言つたか……?)

「新一、哀ちゃんと会つた事あつたつけ?」

「あ、博士の家に行つた時に……」

「あ、そ。でも、怖がらせちゃダメよ 哀ちゃん、この人の事、あんまり気にしなくて良いからね。ただの推理馬鹿なんだから……」  
上機嫌な表情で、蘭は新一の方向を見る。

(蘭、てめつ……)

「は、はい一分かりました!」

すると、灰原は特上の作り笑顔を一人に向けた。

「て、てめえ……このつ『パシッ』へ……」

「新一……?」

振りかざした拳は、きつちりと蘭に握られている。

「覚悟なさい! このつ

「わっ、やめっ! やめっ! ……」

クスリと笑い、哀は再び門の方向を向いた。

(お別れ……そう、別離……言わなくちゃ。自分の口から……)

~~~~~

「おっ！工藤じゃねえか！」
「来た来た、平成のシャーロックホームズ！」
「お隣に新妻連れて登場つてか～」
「絵になるよな～この二人！」
「よつ、おしどり夫婦！」

学校に近付くにつれ、随分とギャラリーが増えていく。纏わりつくただの野次馬だが、下級生までも一人を見て振り向いて、何かを喋くっている。

「…おい、行くぞ。蘭。」
「わっ、新一！待つてよ！」

それにつれ新一は歩行のピッチを上げて行き、蘭はそれを追いかけ

る。

「ふう……」

「もう……学校始まる前から疲れてどうすんなのよ。全く……」

「悪い。何か……」

そこで、新一の言葉が途絶えると、蘭は優しく微笑んだ。

「分かってるよ。私だって嫌だったもん……あんま気にしちゃダメだよ。」

「……気にするや。嫌でもな。」（違うから……何かが。）

新一は体感していた。野次の感覚が、前と違う……野次を受ける感覚が、これまでとは違う事。

登校する度に散々言われてきたような野次だが、これまでとはまるでそれが違う事。

『今まで反論してもさつと流せた野次が、頭にこびり付いて残るうとしている事』

（…くそつ、居心地悪いな。）

足元の石を蹴飛ばし、校門へとぶつけた。

「あ、新一！見て！あれ！」

新しいクラス表が張り出されているのを蘭は見つけ、目を輝かせ

て走り出す。

「えりと…あつたー新ー同じ組だよー3-A!」
喜びをあらわにして、蘭はボードの前で新一を呼んだ。

「わーったから、わーったから…」

「…少し感動しなよ！3年連続一緒なんだから…」

「へーへー……」（別に、それは良い事だけど……）

『何かが違う』

戻つたはずの日常がちゃんと流れ出すまでには、少し時間が掛かる
そんな気が新一にはしていた。

『あいちゃん、またあおつね』

平仮名で書かれた横幕が、クラスには綺麗に吊るされる。緊急で始業式の後開かれたお別れ会は、盛大に行われた。

「ありがと…、み、ん…なつ…」

思わず灰原は涙を零し、探偵団も泣いていた。

自分を受け入れてくれた仲間。

特異な存在を、クラスへと馴染ませてくれた探偵団。

感謝が、表せない程に灰原にこみ上げてきた。

「本当に、ありがと…、み、ん…なつ…つ…」

もう、その後は言葉にならなかつた。

灰原哀という存在の、最後の時間

三人の手紙が、記憶へと焦がしつけられた。

『灰原、元気でな。ちゃんと飯食べろよ。痩せ過ぎも良くねえぞ。』
『…じ、実は…僕、好きだったんです。灰原さんが…寂しいで

すけど、色々教えてもらいました。また、会える日まで。元氣で居て下さいね。』

『哀ちゃん、元氣でね。私も…私も、頑張るから…………』
（私は…元に、戻る……寂しいけど、工藤君の様子を見るなり…。）
これは良策。仕方ない事…本当に、ありがと。皆。）

お別れ会を終えた灰原は、真っ直ぐ帰路へとついた。

3 戻ったばかりの日常（後書き）

この手紙、いつもそりと前半のキーです。

4 重ねた姿

『…………どうして、少しでも……頼つて、くれなかつたんだ……？』

答えは出なかつた。

全てを絞り出すような声が、今も記憶に残り続ける。

『ガチャ』

「あら……工藤君。」

「よ、灰原……。」

小さな溜息をついて、灰原は言つ。

「バレたんでしょう？ 彼に……」

「えっ！」

「知ってるわよ……相当彼、思いつめた表情して……咳いてたから。『何もしてやれなかつた』って。」

「……」

俯いたコナンに、灰原は声を掛けた。

「仕方ないわよ。あなたのお陰で、皆生きてるの……私も。良くやつたわ。全て、あなたが……頑張つたからじゃない。」

『良くやつたよ……お前はな。本当に……良くやつてくれた……。』

苦労だつたな。コナン。』

静かに、コナンは顔を上げた。

「…俺…正しかつたのか?」

珍しく弱氣になるコナンを励ますように、灰原はコナンの肩に手を置き、ゆりくりと撫でた。

「ええ……ええ。きっとね。」

一発自分の頬をつねると、コナンは立ち上がる。

「悪い サッカと始めようぜ。」

「やうね。」

灰原の実験室へと、コナンは『江戸川コナン』の全てを終わらせる為に歩を進めた。

「解毒剤…完成したんだな?」

「だから呼んだんじゃない…」

「ははつ…悪い、悪い…」

~~~~~

「さてと、欠席……と。」

慣れた手つきで、垣田は用曜田の欄に〇を書き込んだ。

ねえ、新一。

え？

— 今日 居残りでしょ? 「

ああ、そんだけと

「異ニサジニ、ハ、詩ニ、モ、ハ、心ニ、モ、器ニ、モ、

卷之三

すると、蘭は暫く考えて、別の案を引っ張りだした。

せれば良いし……

「つたく…ま、サンキュー。助かるぜ…」

工藤

低い声が、前方から響き、新一は思わず苦笑した。

「学校のHRにまで、夫婦会話を持ち込まんてくれ……全く。」「ははっ…すいません。」

思わず、クラス中が笑いの渦に包み込まれ、蘭は赤面し、新一は何故か腹立たしい気分になった。

(…腹立たしい。可笑しいな… そんな感情か? じつにうの…)

「さて 聞いてくれ。」

そんな事を考へてゐる間に、担任は学級事務を手早く終わらせていた。

「今日は転入生が一人……良いよ。入ってきて。」

見えてない手招きをすると、その少女はゆっくりと室内に入ってくれる。

( ( (え…?) ) )

ウェーブのかかった、赤みのある茶髪。

深く吸い込まれて行きそうな、魅力的な碧い瞳。

女性としてはかなりの長身というのもあるが、かなり知的な風格を醸し出す雰囲気。

(ハイリさん…!?)

(あの女…!)

(富野…?)

「富野志保です、よろしく。」

少し頭を下げる、チラリと担任の方を向く。

「あ、ああ…席…そうだな。上藤の隣が空這麼るから…」Jの列の4番目に座つて。」

「はい。」

もつ一度軽く頭を下げると、志保は席へと歩いて行った。

「 ようじべ。上藤君。」

呆気にとられる新一に向けて、少し満足そうな笑みを浮かべて志保は新一の右隣に座つた。

「あの女… そりよ。新一君と一緒に居た…」

（誤解よ…園子。の人、狙われて…姿を隠す為に、新一に匿つてもらつて…え…）

そこまで言つて、何かが蘭の思考回路に引っ掛けた。

（そりなの…でも、蘭。わざわざわざわざわざわざ…  
蘭？）

得意の「新一君は倍率高いんだから」を言おうとした園子は、何かを考え込む蘭を見て言葉をとめた。

（赤みがかつた茶髪、ウェーブがかかつてて  
綺麗な碧い瞳

.....

居てはならない  
同一人物のよつな人間が、確かに居た。

（妙に大人びた… それこそ、大人のような…）

姿が、重なつた。

( ほちやん )

「 そういえば、毛利君。」

ある日の事件解決直後、日暮は思い出したように小五郎に伝えた。

（実はな……この前の新一君が爆発に巻き込まれたと思われた事件で  
な……から……が……）

（……本当にですか……？警部殿……）

（ああ……確かにそうだったんだ……どうだ？誰だか見当はつくかね  
？）

（……）

可能性は、たった一人だった。

（……いいえ。ちょっと私には……）

（そうか……分かった。すまんな。後で事情聴取、頼むぞ。）

（はい……）

「ダストシュートから指紋……」

子供が一人通れる程度の大きさ。  
家に帰つてくるのが遅れた少年。

(江戸川コナン……)

真実に気付いた男が、歯車を狂わせていく事になるとは……まだ、誰も知らない。

全ては、もう始まっていた。

#### 4 重ねた姿（後書き）

回想2つ。伏線伏線：

## 5 不自然過れる偶然

「じゃあ、この問題は…波津。」

「えつと…3 2?」

「ああ、そうだな…」、「間違え易いから…」

随分と眠氣のする授業を展開する数学教師の前に、数名が既にノックアウトされていた。常習犯工藤新一が含まれているのは言うまでもないが、数名は窓の外を眺めていたり、隣の席の人間とひそひそと話をしたりと、視聴率の悪い授業ではある。

（ふああ…）

（園子、大丈夫？）

園子は大きく伸び上がった。

（も、もひ…眠くて眠くて…）

「これを…それじゃ、富…」

「4 3。」

名前を読み上げる前に、さつと答を出した窓の方向を向く志保。

「富野さん…頭良いのね…」

「志保で構わないわ。それに、これぐらい普通よ…」

この園子と志保の受け答えに、やや怒りを覚えた数学教師だが、さつと流して次の問題へと進む。

「おこ…起きる…工藤…」

「く……つと。」

「いれだ。これ。」

田を擦り問題を見て、数式すら書かずに答を口から発した。

「20。」

「……」

「あれ？ 間違えました？」

「…念つてゐながら、起きてこらー。」

「は、はいはい。」

大きく溜息をつき、数学教師はさつと手元の荷物を片付ける。  
「後は自習だ。騒がしくするんじゃないぞ。」

そして、部屋を出て行くと、案の定部屋の中はひざき始めた。

ただ、教室の中の話題は「真面目に受けないと卒業が危ない」と書いておきながら結局熟睡して教師に起こされた途端に素早く暗算解答する名探偵」と「窓の外を眺めていながら教師に指名された瞬間に覚えているのか綺麗に作られたノートの解答を見もせずに読み上げる美女」の一人の話題で持ちきりなのであった。

「凄いよね…富野さん。」

「工藤は相変わらずだけど…な。」

「つたく…何時もあなたこうなの？」

「そうこうお前…は良いのか。ちやつかり版書とつてゐし…」

「」こんな物、やつとやれば良いじゃない…せめて意識を見せないと、本当に卒業できなくなるんじゃないかしら?」

「大丈夫だつて…ふわあ…」

小さく息を吐いて、新一はもう一度机に突つ伏した。

「ね、ねえ…宮野さん?」

蘭が少し恥ずかしそうに尋ねる。

「志保で良いわ。」

「じゃあ…志保ちゃん。どうかで、私と会つた事無い?」

「……」

志保は蘭を少し見つめると、視線を逸らした。

「気のせいじゃないから?少なくとも、私の方は覚えてないけど

「……」

「そ、そうだよね…気のせいだよね。」「めん…」(どうだらつ…でも…)

凄く哀ちゃんに似ている

（そうひだ… そういうえば。）

全てが上手く噛合ひすぎでいる。

「江戸川コナンが江戸川文代とアメリカへ向かつたその日の夕方、突如工藤新一は姿を現した」

「灰原哀が転校したと聞かされた翌日、宮野志保が帝丹高校に転入した」

（可笑しい… 可笑しすぎる…）

考え込む蘭を、志保は見つめていた。

「 5田田、異常なし。」

「 はあ…疲れた。」

志保はわざとキーボードで、新一の身体の状況を打ち込むと、ディスプレイの電源を落とす。

「 まあ、ほぼ完璧に元に戻つたとは思うけど…とは言つても何があるか分からないし。解毒剤で解毒しきれなかつた毒が残つてたら何時何が起こるわからないから…」

「 へーへー…つまり、毎日通えつてか?」

「 そういう事…分かつてきたじゃない。」

「 めんどい…」

小さく志保は溜息をつくと、博士を指差した。

「 それぐらいで面倒臭がつてると、あれになるわよ?」

「 なるわけねえだろ。毎日動いてんだから…」

「 新一が太るとは思えんがな…」（しかし『あれ』とは何じや。『あれ』とは。）

新一の検査の片付けをしている博士が、少々憤慨する。

「 ……じゃ、もう帰つて寝るわ。」

「 ね、ねえ。」

「ん?」

志保の曖昧な問い合わせに、新一は反応した。

(な、何呼び止めるのよ…私。どうして?) 「……今日の蘭さん、どこか変じやなかつた?」

「ん? ああ… そうだな。夕飯一緒に食つた時、随分考え込んでるような顔してたから…いや、元気なんだだけじか、何か考へてるみたいで…」

「…まさか…」

「え?」

「いいえ。なんでもないわ。それじゃ、お休み。」

志保は新一にそつと手を振ると、ディスプレイの電源を入れて、作業を再開した。

「…なんだ、こいつ。」

新一と博士は、地下牢を出て行った。

（…どうして、呼び止めたの？どうでも良い問で…）  
ふと自分の思考が信じられなくなり、志保は一瞬手を止めた。

（上藤君に話題を欲しかった？まさか……）

『あいつ、見かけよりタフじゃねえから…』

（……そんな事を覚えてるのが、どうかしてるのかも…ね。）

自嘲気味に笑って、志保は再び手を動かし始めた。

## 6 眠かれる言葉

『何にも…分かってないのね。』

何も…知らないくせに そう思つてた。

今だつて、思つてる。私はそう思つてる。  
けれど…仕方ないのかもしない。彼の目線はどうせひつたつて動か  
ないから。

今更、私の方に向けようだなんて都合が良すぎへる。  
そう、全て私が…悪いのに。

「彼の『物』を壊したのは私なのに」

彼の時間。彼の待ち人。彼の大切な人達。彼の自由。

彼は、全てを「APT-X 4869」の名の下に奪い取られた。そ  
してそれは…私が作り出した、この世に生み出してしまった物…  
その私が？彼を想う？

そんな事、許されるはずが無い。

……それに、今は何も心配する事ない。

ただ、彼は傍に居るから。それだけで……十分幸せだから。

……私に想う資格なんてない。けれど、それでも十分。  
そう思つてれば良いの。「彼が居なくならないように」……ってね。

もう……二度と、大切な人が……居なくならないように……

『志保。』

……お姉ちゃんみたいに……居なくならないように……

~~~~~

「うわっ！」

名探偵は時計の針を見て、一瞬呆然とする。

枕元においてある、昨晩読みかけの推理小説を見ては、とした。

『深夜2時まで読んだ上、必死に考えて何とかトリックを解こうとしたがその途中で力尽きて眠ってしまった』

「うわあああっ！」
慌てて着替えを棚から出して、数十秒でその推理小説を入れた鞄を
持つて家を飛び出した。

「くそっ、やべって、志保！？」

「バー口オー遅刻すんぞー志……え？」

志保はあからさまに大きな溜息をついて、自らの携帯を開いて新一に見せる。

「25分……7時。」

「あなた、8時25分だと思って飛び出したでしょ？まあやつやそうよね……始業8時だもの。私、今日教員室に用事があるから早く出てるだけだし……」

「や、そっか……悪い。騒がせて……（あれ、でも……だとすれば蘭が来てる時間……そつだよな。蘭はこのくらいにいつも来るし……）

顎に手を当てて何かを考えている新一を見て、もう一度溜息をつくと志保は歩き去つて行く。

「じゃ、先行くから。」

「あ、おーーー。」

新一は、走つて志保を追いかけた。

「何よ……蘭さん待つんじゃないの？」

「多分、もう行つちまつたか遅れてるがだらつ……どうせよ俺の家に呼びに寄つてる余裕ねえよ。」

「はいはい……付いてきたければどうぞ！」勝手に……

「へーへー……」

（嬉しくて笑い。）

（ほそりと自分に咳いて、志保は新一の方も見ず歩き続けた。）

~~~~~

「ふう……」

ようやく手元に出来上がった複数枚のレポートを、並べて蘭は眺める。

「蘭、終わった？」

「うん、何とか……ん~…」

朝日が心地良く身体に当たる。

「新一、大丈夫かな…」

「ああ、旦那ね。まあ蘭が居ないと起きられないって…赤子じやあるまいし、大丈夫でしょ。」

「そ、そうだね……って、旦那じゃないよ。」

「お、ムキになつて反抗…」

「ムキになんかなつてないわよー…」

（今なつたじやない…）「はいはい。」

頬を少し赤く染めながら、レポートをホツチキスで留め、一時間田の用意を引っ張り出した。

「おい…聞いたか。」

「ああ、工藤の奴、朝……富野さんと歩いて来たんだつてさ。」

（えつ！？）

男子の方の噂が、耳元にかすかに聞こえてきて、蘭は衝撃を受ける。

「今、どこに居るの？一人とも…」

「教員室だつて。わざわざ新一君がついて行つてゐみたい…」

女子の方にまで、既に噂は通つてゐるらしい。

「浮気が？まさか…」

「たまたまだる…毛利蘭命のあいつが、浮氣なんぢあるはずねえつて。」

「そりやそりや…」

たまらず、園子は立ち上がつた。

「ちよつとあなた達、どうこうつ事…？」

園子が、ひそひそと話していた男子の方向に近付いた時、『それ』は自然と示された。

(え……！？)

扉を開けた普段どおり眠そうに入つてくる一人目の男と、その後ろを俯いて歩く一人目の女に、思わずクラス中全員の視線が集まつた。

「……なんだよ。」

入った途端に走る、謎の沈黙。

新一は首を大きく傾げ、志保は下を俯く。

「 んだよ。お前ら…何か俺の顔についてつか? 」

一斉に、クラスの視線が集まつた事に首を傾げながら問いか返す新一。

「 ……」「めぐ、工藤君。」

「え?」

志保は俯かせていた頭を上げないまま、逆方向に歩き出した。

「お、おい…志保?」

「私、あの後急に具合が悪くなつたから休んだ そう伝えておいて…ごめんなさい。」

「え? ちよつ…待てよ…」

新一は慌てて追いかけるように教室を飛び出した。

静かになつた教室の沈黙を、数名の生徒が徐々に破つていく。

「……なあ……工藤って、あんな奴だつたか？」

「推理と毛利しか眼中にない……筈だつたよな。」

「転校生に一目惚れか？」

「それはねえだろ……アイツに限つては……」

園子は、右拳を震わせながら握り締めている。

（あの女……！絶対に、新一君誑かしたのよ……許せない……！）

右目は充血し、相當に怒りを覚えている様子は、いつもの彼女とはかけ離れた姿だった。

「……園子。」

「え？」

それに気付きながらも、蘭は笑顔で言つ。

「私の事は心配しないで。」

「でもつ……！」

「良いのよ。別に……新一が、新一が……」

『好きなのに』

蘭は知りたかった。この1年間…新一が一体何を見て、どう過ごしてきたのか。

1年間で…何が変化したのか。

「…変わっちゃったなら、変わっちゃたんだよ。」

「蘭…？」

この1年間で 何を手に入れたのか。貴方は何に触れ、何を知り、何を手に入れたのか。

そして『あの人物』は、貴方が『手に入れた人物』なのか。

(……私が、言わなきやいけないのに。)

告白の返事を、返さなければならないのに。  
それが最優先される筈なのに。

(私……このままじゃ、何か大切な物を…失っちゃつ氣がする…)

新一が、志保を好きなのか？それはただの過剰な不安に過ぎないのか？

新一は、まだ自分の事を想ってくれているのか？それとももう捨てられてしまったのか？

(…誰か…答え、出してよ…)

考へても答が出る訳がない問が、頭の中を駆け巡った。

~~~~~

「お、おい！志保！」

新一が走つて追いかけた途端に逃げ出す彼女に追いついたのは校門を出てすぐだつた。

「どうしたんだよ……いきなり走り出して……何か嫌な事でもあつたのかよ?」

息切れして、母のぐりと髪を整えながら歩く慈保の顔を覗き込むよ
うにして、新一も並んで歩く。

「…気にしないで。あなたは学校に戻りなさいよ。進級できるか、

怪しこんでしょ?」「

「あーもつーだからなあ!」

新一はぐつと志保の肩を両手で掴むと、門の外壁へと押しあつた。

「聞いてんだよーお前が…お前が、また何で悩んでんのか…」

「工藤君…?」

「お前…また余計な事考えて、悩んでんじゃねえかって…不安でさ。

」

ゆづくりと新一は両手を離した。

「…いつも悩んでたから。少し心配なんだよな。そういうの…『まだどうでも良い事で悩んでやがる』って思つてもさ、結局何故か気になるなんでだろな、運命共同体とかなんかそういう物だつたからかな?」

少し深刻そうな表情になつてたのを自分で感じ、すぐに何時ものスマイルに戻す新一。

「…ま、お前にもお前の事情があるもんな。悪い。変な事言つて…先生には欠席つとくよ。家で、ゆづくり休んで…でも、無茶はすんなよ?」

それだけ残して、新一は歩き去つて行く。

（…バカ。あんなに…あんなに、優しいくせに……私を良く分かつ
てるくせに、一番大切な事だけは…何も…分かつてくれない…）

ゆつくりと、志保は阿笠邸へ向かい歩を進める。

学校と反対側に歩いていくその彼女の姿が、遅刻ギリギリで焦つ
て走る生徒達の目を少し惹き付け、また不自然な感覚にさせていた。

（…分かつて欲しくも、ないけど……か。）

8 強まる不安

『ガラツ』

豪快な音と共に、後ろの戸が開き、数コソンマ遅れて前の戸が開いた。

「さて…と。出席取るぞー。」

（危ねええ……間に合つた…）

思わず舌をペロッと出した新一に、クラス中が爆笑を浴びせる。数名を除いて。

小学生、中学生の頃から蘭と新一の関係といつのは学校内で度々騒がれていた。

何処で噂がたつたのだろうか。幼馴染という関係から、勝手に恋入同士かもしれないという噂をたてるような人間が、どこかに居たのだろう。

帝丹高校に入つてからも、帝丹中学からの卒業生の噂でクラス中どころか学年中に一人の噂は広まっている。とはいえ、一人がもう既にお互いに自分の想いを告白した者同士だという事はまだ園子ぐらいのものだが。

しかし、それだけに、今回の志保の一件が不自然であつた。

新一が『毛利蘭』以外の女相手に、あそこまで慌てた表情を見せた事自体が、初めてなのである。

何らかの関係性を信じて、クラス中は疑わなかつた。『宮野志保と工藤新一の間には何かがある』と。

だから、気になつていた人間：園子、蘭を含め、数名は笑うじころか、新一に疑念を向けていたのだ。

「ん？ つと……そこは……宮野か。」

「あ。志保は休みですよ。こっち来てから、体調悪くなつたんで……一人で帰つたと思ひます。」

「そうか……分かつた。」

慌しそうに担任は、名簿の志保の所にチェックをつけると、名簿を折りたたんだ。

「とりあえず、学級事務のプリントをここにおいておくから……まあ、父母会その他の連絡とか、そういうのだからだから、学級委員。配つといてくれ。」

「あ、はい。」

そして、担任は荷物を纏めて、教室を出て行つた。

（今しか…）

震える足。

（聞かなきや…聞かなきや、進めない。前に…）

両手にもそれが伝わる。

（…好きなの。新一が…知りたいの。私だって…もっと新一を、
知りたい…）

僅かに震え続ける身体を無理矢理に立たせ、僅か数メートル先の新一の席まで歩いていく。

「ねえ、新一…
「ん？」

息が完全に整った新一は、笑顔で蘭の方を振り向く。

「何だ？」

「…あのさ、新一。今日…ん。」

新一は素早く、蘭の唇に指を当てる。

「……オメーら、なあ……なんだ? 今度は録音機まで……『ガコンッ!
!』

聞き耳を立てていた男子生徒数名を追っ払い、更に自分の椅子の裏に取り付けられていた録音機を取り外すと、右腕で放り投げて、ゴミ箱にストライク送球した。

「……つたぐ。で、なんだつたつけ?」

「あ、うん……あのね、今日。」

震えを押し殺して、蘭は言葉を次いだ。

「新一の家、夜行つても良い?」

「あ、ああ……別に、良いけど。」

「……『じめんね。いきなり……』」

「いや、気にしてねえけど……」（……?）

何かが、新一の心に引っ掛けた瞬間だつた。

そして不思議そうな表情をする新一を見て、蘭の心にもまた、何かが引っ掛けた。

9 教えて欲しい事

完全に陽は落ち、夕闇が広がって視界もかなり悪くなってきた。
そして、蘭は呼び鈴を鳴らし、中の一人暮らしの住民が出て来るのを待つ。

『蘭か?』

「あ、うん。」

『分かった。今開けつから、待つてろ。』

「分かった。」

夕食が終わって、食器を洗っていたのだろうか。その不器用そうな手つきを想像すると、思わず蘭は軽く笑った。

「へーへー…悪かったな。食器割るような手捌きですよーだ。」

一瞬、蘭は呆気に取られる。

「な、なんだよ。」

「……ううん、なんでもない。」

新一は、蘭を中に入るように促し、家中へと上げた。

「 で?何か用事、あつたつけ?それとも何か…」

「……ちよつと、ね。」

リビングのテーブルの、手前側の椅子に新一が座ると、蘭はその正面に座る。

「……けど、毎月掃除してくれたって？」

「え……う、うん。一応ね。」

綺麗に掃除された部屋をぐるっと見回して、思わず新一は感心する。

「……まあ、途中から別の人に入つてきちゃつて、後はその人が大体やつてたけどね。」

「へー……」

その反応に、蘭が食いついた。

「『『へー』つて、新一が良いつて言つたんでしょう？大学院生の、

沖矢昴さん。』

「あ、ああ……そうだった。」（あぶねつ……忘れてた、忘れてた。）

一度、この家に沖矢昴が住み込んでいた事を、コナン時代に経験していた事を思い出し、新一は心の中でほつと一息つく。

「……ねえ、新一。」

「え？」

蘭は、両方の肘をテーブルにつけ、両手で頭を支えるポーズのまま、静かに話し始めた。

「新一が居なくなつてから、突然現れた…コナン君の事。知つてるでしょ？」

「…ああ。」

少し声のトーンを落として、蘭は話す。

「…新一君とコナン君、仲良かつたんだよね。」

「え、え？」

「…だって、私の事…妙に知つてたし。私が話してないような事も…新一はコナン君の事、知つてたんだもんね。」

「…ま、まあそうだけど…」

次の言葉に、蘭は詰まる。

それでも。

「ねえ、新一。」

凛とした表情。真正面から、蘭は新一に向むかひ。

（……そり、聞かなきやいけない……事……）

「……新一。私が今、一番新一に聞きたいたつて……なんだと想ひつへ。」

「…静かに、蘭は頷いた。

静かに、蘭は頷いた。

「今、私が聞きた」

「ん」

真剣に腕組みをして考える新一を見て、思わず蘭は吹き出しそうになる。

「何だろ。」

「わかんないかなあ。」

「……悪かつたな。」

「別に… 悪くなんて無いよ。わかんないと思ひし。」

蘭は軽く笑みを返しながらも、真剣な口調で答えた。

「教えて欲しいの。新一に……」

「え？」

「この1年間、何を新一は見て来たの？」

「…へ？」

突然の蘭の重大な質問に、思わず力の無い声を新一は上げる。

「……み、見てきた物……って、お前。そんなの聞いてどうすんだよ？」

「…分からぬ、かな？」

ぎゅっと拳を握り締めて、蘭は何かをこらえながら何とか声を振り絞る。

「…知りたいの。新一を…もつと知りたい。新一が、一体…1年間、一緒に居れなかつた新一が、この間…何を見てきたのか。新一が、どう変わつたのか…」

「えつ…」

「新一は変わつたよ…絶対。変わつたよ。絶対に…もう、1年前の自信過剰なただの推理オタクじやない。何か…何か変わつた。そうなの。どうして変わつたのか…」

「…蘭。」

彼女はまだ何も知らない。

工藤新一が、江戸川コナンとしてずっと毛利蘭の傍には居た事。

その中で、小学生という立場をもう一度経験し、それが今の工藤新一の変化へと繋がっている事。

彼女はまだ何も知らない。

探偵として自殺を許すという事に大きな衝撃を受けた事。

巨大組織との対決の中で、確実に一人の人間として成長していた事。

彼女は…まだ何も知らない。

まさかその大きな変化に『灰原哀＝宮野志保』が関わっていたなんて。

まだ、彼女は何も知らない。

「…教えてよ。新一。」

全てを。工藤新一が好きな人間として、全てを。
「私は…知りたいの。」

「…あ、あのさ。」
「え？」

新一は頭をポリポリと搔きながら、少し複雑そうな表情で言つ。

「……」「めさん。本当に……」

「……？」

「待つて、くれねえか？」

蘭の表情が、一気に曇つた。

当然、新一にもそれはすぐに理解できた。

(……違つ……何かが……) 「……ダメ。もう待てない。」
「え……」

蘭は、一粒、一粒と涙を零す。

「……」れ以上、待てないよ……また、どうか……行っちゃう……た
だでさえ、今……すぐ近くに、感じられないのに……」

「つ……」

「可笑しいよ……一年前、すぐ傍に……居た新一、今も……傍に居る
のに。傍に居るのに……なんだか、距離が……離れ……」

「違つ……」

大きな音を立てて、新一はテーブルを叩いた。

「俺は……俺は、蘭の事が好きなんだよ……それは……絶対変わらね
え……けれど、けれど……」

「新一……」

ゆつくりと、新一は蘭の元に歩み寄り、蘭を抱き締める。

「…待つて、くれ。必ず…話すから。本当に我儘だけど…お願い、だから…」

蘭は、袖で瞳を拭つた。

「…分かつた。待つ。」

「蘭…」

「…必ず、教えてね?」

蘭の純粋な笑顔に、惹き込まれるよつて新一は笑顔を作つた。

「ああ。約束する。」

「…ありがと。」

ゆつくりと新一が蘭を離すと、蘭は「また明日ね」とだけ言つて、部屋を出て、玄関のドアを開いた。

「…明日、迎えに来るね。」

「ああ…頼む。」

「頼むつて…もう。」

「ははつ…」

大きく笑い合う二人。

けれど、片方の瞳は引きつっていた。

何だ？ 何なんだ？

（違つ…違つ…）

『蘭が好きだから』なんて、強がりに過ぎない。

何かを…何かを認めたくないから、いや…蘭を傷つけたくないから、
そう言葉を放つだけ…

好きなのは確か。けれど…違う…何かが、違う…
俺が、認めたくない…何かが…ある…

自分の変化… そう、自分の変化…

…人は変わる。必ず…変わつていかない人間なんて、いない…けれど。

変わる方向が…間違つてるのか…？

『工藤君。』

どうして…あいつの姿が……こういう時に頭に浮かぶ…？

11 そんな午後の一時

（好きなのよ。あなたが。）

徐々に虚ろになっていく瞳。崩れる体勢。

（そう……あなたが。私は……あなたが。）

寝息一つすら立てず、机に倒れ込む少年。

（……そんな資格……私には、な……い……のに……）

その瞳に惹かれながら、少女は静かに眠りへと墜ちて行く。

（……罪……私に、私、私に……罰えられ、た……罪……）

僅かに、蘭の方向へと顔を向ける。

いつも笑顔。

（私に、あん、な……顔は、出来、ない……）

少年が惹かれる理由が分かる気がするほどの 美しき彼女の笑顔。

(…彼、が…いつ、を向いてくれる…事、なん、て…)

そんな午後の一時。

＼＼＼＼＼＼＼＼

両方の瞳がゆっくりと開く。

(ん~…ん…?)

新一が顔を上げると、黒板には文字の羅列。

（：寝てたのか。俺。）

くるくると見回すと、「もつ、新一つたり。」と言つた表情をする蘭の姿があった。

(
.....
h_o)
(

もう一度倒れ込もうか、それとも外でも眺めてようかと思つた所で、視界にその少女の姿が入つた。

(志保。)

その言葉を呴く。

(ダメだ。)

瞳が逸らせない。柔らかい表情、静かに閉じられた口元、綺麗な髪色。

(…やつぱつ…気付いたら…)

こいつの方向を向いている

(俺は 俺は)

毛利蘭に告白した想い。「好きな女の子」への言葉。

(… のに … のにつ …)

今、自分が惹かれる存在は……田の前の、江戸川コナンの姿においての……運命共同体の、元の姿。

(……………)

そんな午後の一時。

}{ } } } } }

(ふあ……あ……ん……)

大きな欠伸を思わず漏らしてしまい、少し目をこすりて大きく伸びをしてみる。

(眠い…………あれ?)

ふと目をやると、やつれ今まで眠っていた一人のうし、何故か少年が先に起きた。

(志保ちゃんが先に起きると思つてたけど…)

新一がぐるぐると見回して、うしを向いてきたので、軽く呆れたような表情をして見せる。

(まあ…新一らしいけどね。)

そう思つてみると、蘭の心は確実に鼓動を響かせる。

(……どうして、だる。)

新一の方を向けば、隣の志保はほほ確実に視界に入るわけだが、それが何故か嫌な感覚を放つ。

(……関係、ある…気がする。)

並ぶ二人の間に、何かが。

(新一の…………1年間の、空白の…新一。)

「待つていて欲しい」という言葉が頭を過ぎりながらも、蘭は頭の

中で思考を張り巡らせた。

（……『めん。新一……やつぱ、私知りたい。）

好きだから。それでも、知りたい。

（やつだ…今週末、トロピカルランドに誘おう。）

思い出の場所。最後に…二人が、完全な状態で会った日。

（後で、誘つてみよ。年中暇な新一なら大丈夫…だよね。）

ふと気付くと、右手は少し震えていた。

（……ありえないよね。そんな事。）

新一がその隣の女性に心変わりしたなんて

（昨日…好きだつて言つてくれたんだから。）

そんな午後の一時。

「…？」

いつものように自宅へと戻ってきた志保が、ふと感じた違和感。

（…ん。）

何かが引っ掛けた足元に目をやる。

男物の運動靴がそこに、並べて置かれていた。

（…）
（…）

何しに来たのだろうといつ疑問以上に、志保の心の中から強い感情がこみ上げる。

そこにいる少年。

（…何考えてんのよ…）

新一が、ひょっこりとソファに座ったまま顔をじらじらに向けた。

「お、志保。お帰り。」

「…随分と素早いのね。私も寄り道せずに一直線で帰つて来たつもりだつたけど…」

「あ、気付かなかつたのか。俺6限抜け出してきたから。」

「…」

「いやー…歌唱なんてやってらんなくつて。あの先生、結構ご老体で後ろの方まで見えてなかつたから…」

小さく、志保は溜息をついた。

「…本当に内申、大丈夫なの？」

「…あなた。」

軽く両手を上に上げて見せた新一に、再び志保は小さく溜め息をついた。

そして、よつやく本来問うべき事に辿り着く。

「それより……何しに来たの？まさか貴方、家間違えてない？」

「認知症って言うのか？そういうの……」

「まあ、そうかしら。」

小さく新一は息を吐いて、首を横に振る。

「ないない……俺は、お前を待つてたんだから……」
(えつ！?)

志保の心に、静かに波が立ち始める。

「……私を？」

「……まあ、な、べ、別に大したこと……じゃねえんだけど……」

少し恥ずかしそうに横を俯きながら、新一は言つ。

「……何の為に？」

「いや、……いやさ。ちょっと……」

「何よ。わざわざこなすことよ。」

志保はわざわざ靴を脱いで並べ、リビングの椅子に自分の鞄を一度置ぐ。

「……何？」

小さく新一は息を吸い込むと、よつやかく覚悟を決めたように話しがめた。

「母さんが、前言つてたんだ。」

「え？」

「……『女の子』が男の子の顔を見る時は、その子の顔に塵がついてる時か』……」

そこで二人の時間は凍結した。

「まさか。」

ボソッと志保は呟いて、さつさと鞄を拾い上げ更衣室へと向かつ。

「お、おーー志保ーー」

「用がそれだけならもう帰つて。ちよつと疲れたから寝たいの。それじ。せー」

「……」

すたすたと歩いて志保は部屋へと消えていった。

(… そうだよな。俺の勘違いか。あれだけ冷静に切られるんだ…俺の、衝動的な感情。あっちからしてみりや迷惑だよな。)

ふと、思つてしまつた事。自分が、ここ数日で自然と思つてしまつた事。

その時だつた。

「あれ…？」

~~~~~

運命共同体。

江戸川コナンと灰原哀といつ、この世界で一人だけの存在する筈の無い人間同士。

どちらも実年齢はそれより10も上。それもその筈、彼らは幼児化した姿であるから。

江戸川コナンは工藤新一。

灰原哀は富野志保。

けれど、元の二人には最初は接点なんてなかつた。

工藤新一は高校生探偵であつたし、富野志保は科学者として働かされていた。

二人を結んだ物は、悲しくも一つの薬品であった。

A P T X 4 8 6 9。

以来、元に戻りたい、早く心配させている人々を安心させてあげたいという気持ちが度々コナンを襲い、早く戻したい、これ以上迷惑を掛けさせられないという思いが灰原を度々包み込んだ。

『運命共同体』。片方が居なくなれば、もう片方も居なくなる。

江戸川コナンが消えれば、組織に迫るのは不可能だったし、灰原哀も死んだだろう。

灰原哀が消えれば、解毒剤を作り出す事は不可能だったし、江戸川コナンも死んだだろう。

一人が、お互いがお互いに心から感謝し合っているのは、言つまでも無いのだ。

だから、新一は自然と疑問が生まれた。

『志保は自分に氣があるのか?』

有希子の話を例に出したのは、あくまで何も他に考えられる事例がなかつたからだつた。

とにかく、聞きたかった。志保が、一体何を思つてゐるのか……と。

そして、自身の中にもう一つ疑問が生まれた。

『自分は志保に氣があるのか?』

(…まあ、もう聞く必要も無いけどな。)

小さく、新一は溜息をついて志保の部屋のドアの取っ手に手を掛けた。

~~~~~

自分のベッドに鞄を置くと、制服のまま彼女はパソコンの前に座つた。

（…何考えてんのよ。）

肘を付いて、頭に手をやつ、ぎゅっと歯を食い縛る。

（分かってるんでしょ？…彼から…彼に近付いやいけない。これ以上…これ以上近付こうとしちゃいけないって……罪ある人間として、償う為に生かされてるのに…新たな罪をまた作り出して何をするの…？）

『アイツ、見かけよりタフじゃねえから…』

「きやつ…」

ふりつとして、思わずバランスを崩して頭を机に打ち付ける。

（…でも、でも…）

蘇る支えの言葉。

『灰原哀』を何度も救つてくれた『江戸川コナン』といつ存在。即ち、お互いに元に戻った姿、『富野志保』と『上藤新一』といつ存在。

(…私は…)

「…何言つてんのよ。」

それでも、志保はその葛藤を押し殺す。

「私が…彼を好きになるわけないじゃない。」

そういうて、凌ごうとする。頭が反発しながらも、無理矢理に押さえ込む。

(そう…私は黒の人間。工藤君と一緒になれば、きっと…彼を手にかけてしまうから。)

『ガチャ』

「おーい…志保？」

声が、頭の中を一瞬で崩壊させる。

「財布。落ちてたぜ、さう。」

軽く新一はドア際から振り向いた志保に向けて、軽くトスする。

『フサエブランドの財布』

「う……」

『何探してんだ？ 灰原。』

『ええ、ちょっと財布を……そういえば、まだ渡してくれてないじゃない？』

『……あれかよ。高いんだぞ？』

『そうよね。じゃあいいわ、また元に戻つてから買えば』

『いや、いい。ちょっと小さいけど……これでいいなら。』

『あら、可愛いじゃない……良いわ。それで。』

元の姿に戻る前に、江戸川コナンが買つてくれた、あの日の演技料にして最後のプレゼント。

「…」で。

「え？」

彼女の回路を回轉させ、破壊するにはこれは十分すぎた。

「…ふざけないでよ。」

「へ？」

来ないで！…もう一度と私の所に来ないで…！

13 現れない答

『新一、今度の日曜日トロピカルランド行かない？久しぶりに行つてみたいな…じゃあ、明日、学校でね。』

ピッ

留守電が終わると、新一は大きく溜め息をつく。

（……なんで怒らせちまつたんだる…）

何故、突然志保があんな事を言つたのか。

何故、彼女が突然自分を拒絶したのか。

（あいつ……）

一体自分が…彼女に何を与えたのだろうか？

満月の光が、眠るには少し眩しい。

けれど、カーテンを締め切った所でどちらかせよ新一は眠れはしなかつた。

『もう帰つて！』

(なんだろ、な…)

『顔色悪いよ?』

蘭の言葉が頭に蘇る。

昨晚の電話の事なんかすっかり忘れてた。トロピカルランド、だつ
け。誘われたのか…

『えつと…行く?』

遠慮がちに聞いてきた蘭の言葉に、小さく頷いた。

『もう帰つて…』

そんな時でも、今更に呟くはずの彼女の言葉は頭にじりじり響き
続ける。

響く度に、やがて隣の空席に手をやる。

『富野さんは、風邪で…』

聞きなれた担任の朝呆けしたような口調。

『何か聞いてないの?』

蘭に聞かれたけど、今度は何も答えなかつた自分。

…何時からだろ?。

自分の中に、違和感を感じるようになるのは。

蘭が好きだつたし、蘭もそう返してくれた。
なのに、何かが違う。何かが可笑しい。

自分の蘭に対する感情が偽物だつたなんて思わない。
けれどそれを上回る何かが、自分の中に存在する可能性を否定する事が出来ない自分が居る。

『あなたと、私は……』

運命共同体。

片方が居なくなれば、もう片方も存在できない。

けれどそんな事、志保からすればもう何も関係が無いのかかもしれない。

『もう帰つて!』

志保は結局、自分に対する感情は無かつたという事。

0という数字が始まりならば、彼女に変化があるのかも知れない。
それでも、自分には待ち続けてくれた大切な人が居る。

守りたい
愛したい
離したくない

けれど、自分の感情に嘘はつけない。
たとえ志保が自分を想つて無くとも、結局自分は彼女の事が好き
なのではないか？

蘭
以上
に

俺は、確かに蘭の誘いに頷いた。

けれど、俺はそれだけで楽しみになつていていた筈だった。蘭と一緒に出掛ける事。それが少なからず楽しみとして感じられていた筈だ。いや、楽しみとしてではなくても、不快感は感じなかつた。出掛ければ、それは必ず大切な思い出となってくれる。蘭の笑顔が残り、そこから自然と風景が蘇つてくれる。

なのに、何も感じない自分が今、ここにいる。

離
さ
け
な
い
愛
し
た
い
守
り
た
い

それは志保の事ではないか？

自分の感情は、結局彼女に向いていたのではないか？

（くわい）

むしゃくしゃして、右足で軽く足元のプリントを踏み潰す。

やう簡単に、答えが出る物ではなかった。

14 呼び出した理由

少女の心も、流石に苛立ち始めた。

(なんで来ないのよ…新一…)

時間になつても現れない新一の携帯に電話を掛けてみたが、反応は全く無い。

もしかしたら事件なのだろうか…と思つて新一の自宅に今度は掛けてみると、こちらは留守電になつていなかつた。

うつかりして入れ忘れたのだろうか?

取り敢えず、しばらく待つてみる事にはしたものの、呼び出した時間からもう一時間は経とうとしている。

だが、新一からの連絡は全く無い。

(…腹立つ…分かつてんのかな。新一は…)

頬が自然と少し膨らむ。

(…決心、したのよ…)

もう一度、蘭は携帯を開き、新一の自宅へと電話を掛けた。

返つて来る音など、存在する筈が無い。

(…まさか。)

一筋の不安が頭を過ぎる。工藤新一が再び、何かの事件に巻き込まれ…そして、また自分の目の前から居なくなってしまう事。またずっと、会えなくなってしまう事。こうして巡り合えたチャンスの日に、またしても新一が消えてしまう事。

そして、もう一つへの可能性の不信感。

(…志保さん?)

ぎゅっと顔を噛み締める。

「私は……」

彼女は優しく微笑む。

少しの衝突をしても、自分に非がある事に気付けば必ず謝る。
正義という物の正しい姿を知り、彼女自身がそれを理解している。

素直過ぎる彼女だから、人を強く疑う事なんて殆ど無かつた。
そして、この素直さが、新一を惹き付けたのだろう。

彼の言葉を疑う事は、一度もしなかつた。

新一が嘘を言っていたなんて、誤魔化してたなんて思いもしなかつた。

けれど、たった今 一つの疑念が彼女の頭の中を支配する。
『彼は彼女に「変化させられてしまった」のではないか?』

彼女は、ゆっくりと賑わうトロピカルランドの門の前をする。
その時だった。

(新一……)

待ち詫びていた彼からの電話が掛かってきたのは。

素早く携帯を開き、ボタンを押して、大きく息を吸い込んだ。

『今どこー? 何時だと思つてるのよつー』

壯絶な叫び声に、電話先の相手は耳を慌てて塞いだに違ひない。

「わり、わり…ちょっと、手放せない用事が…」

『手放せない用事つて…何よ! 私、ずっと待つてるのよー!』

「あ、ああ……ごめん。俺がずっと持つてた事件の事で…」

『また…事件つて。』

蘭は小さく溜息をついた。と同時に、僅かに安心した。

(そつか。考えすぎか…志保さんがそんな事、するわけないよね。)

「友達になりたい。」

彼女ならそう思うだろ？。志保とも、仲良くなりたい。もつと志保の事を知つて、友達になりたい。

お人好し過ぎる。きっと新一はそう呟く。

けれど、全く同じ局面が悲劇を生むのは、まだ先の事。

電話を切つた新一は、ゆつくじとポケットに携帯を入れる。

「……」めんなさい。わざわざ……断りせて。」

「別に……構わねえけど。」

志保は心が裂けて、壊れそうな気がした。

（彼が……何で迷つてたかも考へないで。誘つて……）

それでも、いやだからこそ、こつして新一が時間を作つてくれたから、言わなきゃいけない事がある。

「……」の前の事。本当に、悪いと思つてるわ。」

「いや、別」

「私のせい。全部……突然、あなたに怒りをぶつけて……」

『もう帰つてー!』

二人が、同じ言葉を同時に浮かべる。

「……知つてゐるでしょ?私が素直じゃないって。」

「……っ……」

「彼女とは正反対。優しくて、強い。何処までも理想的な存在……彼女はね。けれど、私は正反対。」

言葉を区切る 何かが頭の中をぐるぐると廻る。
螺旋を描き、徐々に絡み合つ。

「何時からなのかしら?もう思い出せないけど……私はあなたが信じられないくらい頼もしくなつた。」

「……」

「運命共同体なんて言つたけど、所詮私の強がりよ。あなたは一人でも生きていけるわ。いいえ、むしろ私なんて重荷が居るより、一人の方が組織に迫りやすかつたでしょうね。」

「いや、それは」

「私じゃなくたつて、APT-X 4869の開発が進めば、自然と解毒剤なんて手に入つたわ。結局、科学者である私の代わりなんか、幾らだつて居るのよ。もしあなたがその人間に恩を感じて、蘭さんから心変わりしたとすれば、それはそれも一つだつたでしょうね。私には止める資格は無いわ。けれど、少なくとも……」

彼女は一粒零れた涙を、袖で拭つた。

「……気付いてた。あなたが私を気に掛けてる事。けれど……もう止めて。私はもう良いの。そして出来る事なら……私に止めを刺して。」

「……は？」

「『俺は蘭が好きだから』……そつ言つて。お願ひだから。」

14 呼び出した理由（後書き）

少し修正。

15 見出した真実

「……え…」

彼女は平然とした表情で、繰り返す。

「『俺は蘭が好きだから』それだけで良いのよ。あなたがそう言つてくれるだけで…私はあなたを一度と氣にする必要も無くなり、あなたの足を引っ張り続け、あなたを惑わす存在との関わりを断てる…ね？そっちの方があなたにとつても簡単でしょう？」

「…」

小さく微笑み、彼女はゆっくりと立ち上がった。

「……今じゃなくて良いわ。私は待ってる…あなたがそう言つてくれるのを。」

「『めんなさい、余計な時間をとらせて。けれど、もうあなたには余計な事を考えて欲しくない…』

新一の方を一度だけ振り向いて、部屋を出る。

「…そしてくれる事が、私にとって…一番嬉しい事だから。」

彼女はそれでも優しく微笑んで、扉を閉めた。

ブザー音が鳴り響く。蘭からのメール。

『終わつたら、教えてね。少しでも時間があつたら、ポアロにでも行かない？

無理ならまた今度、トロピカルランド行こうね。』

結局、新一はそのままソファに横に倒れてしまった。

あの日から数日。

最近、志保と蘭が一緒に帰るようになった。

俺と志保がさほど話す事が無くなつたからだ。ひひ。ちよくちよく
一人で一緒に帰つてゐる。

後ろからついてつた事もあるけど、志保も楽しそうだ。
もつ、恐らく俺の事なんか眼中にも無いんだろう。

…どうして。

なんで、あいつは…

『私はあなたを一度と氣にする必要も無くなり、あなたの足を引つ
張り続け、あなたを惑わす存在との関わりを断てる……ね? そつち
の方があなたにとつても簡単でしょう?』

あいつは…

俺は…

違う。

絶対、違う。

志保は…間違ってる。

あんな事を言つたって、あいつの本心も俺の本心も変わりはしない…

真実はいつも一つ、か。

ははっ…下らねえや。

『俺が好きなのは西野志保だから

それだけでいい。

16 抱き締められた心（前書き）

タイトルの良い書き方真剣に募集。活動報告まで

16 抱き締められた心

「あ、工藤君 おはよ。」「あ、ああ……」

家を出た途端に、鉢合わせになる一人。 といつても、これが毎日続いているようなものだが。

「ん～……良い天気ね、ほんと。」「あ、ああ……まあな。」

自然な表情を作り続ける志保を、小さく新一は睨みつける。

「あ、志保ちゃん！ 新一！」
「あら……蘭さん。」

蘭は一人の姿を視認すると、急いで駆けてくる。
「良かつたわね。工藤君。」「何がだよ。」「さあ？ 何がかしら？」

軽く志保は息を吐いて、蘭の方向を向く。

「は、はあ……あれ？ どうしたの？ 一人とも……」「別に、なんでもないわ……」

「そつか。じや、はやく行こ? まだ時間はあるナビ…」
「そうね。行きましょウ、工藤君も。」

「へーへー…」

不機嫌そうな表情をする新一を見て、蘭は志保に耳打ちした。

(…何か、あつたの?)
(さあ…私には良く分からぬけど。)
(……)

自然と新一は少しづつ距離を取つて行き、徐々に離れていった。

「新一!」

蘭が声を掛けても反応する気配は無く、新一は一人重そうな足取りで離れて歩き続ける。

「体調悪いのかな…?」
「かもしれないわね。」
「…新一! 先行つてるよー!」

少し迷いながらも蘭が大きな声でそう言つと、新一は小さく頷いた。

「…いこつか。志保ちやん。」
「…その『志保ちゃん』つていうの、やめてほしいんだけど。」
「えー…私より年上でしょ? 呼び捨てには出来ないし…」
「別に良いわよ。呼び捨てでも…」
「でも、やっぱ『ちゃん』付いてた方が可愛いし。」
「…」

小さく溜息をついたが、志保としてまさかいつでもなかつた。

「...別に、良じナビ...」

だが、その時。

既に、離れながらも後ろを歩いていた箇の少年の姿はそこには無かつた。

~~~~~

ほら見ろよ。

振り絞りつとして、言葉が出ない。

なんて言えばいい？

あいつのマイナス思考は今に始まつた事じやねえ。

確かにそれだけだ。

けれど、それでも俺だつて余計な事ばっか考える。

『遅刻するわよ？』

何処からともなく、あいつの声が聞こえてくる。  
この小さな公園。無人の広場。寝転がつた自分に、何処からともな  
く声が掛か…

え…！

「！？志保！？」

「つたく…突然居なくなったりして。蘭さんも心配してたから、彼女には『見つけてくるから先に行つて』って言つておいたわ。」

…今から急げば、まだ間に合つか。  
けど、あいつ…

…いつ。いつしかない。今しかないから。

「早く行きましょう。まだ1時間には間に合」  
「待てよ。」  
今しか…

~~~~~

「待てよ。」

わざわざと歩き去りつつある志保を、新一は呼び止めた。

「……何よ。私まで盛大に叱られたくないんだけど。あなただけなら
まだ少し……」

「……また、繰り返すのか？」

「……え？」

その言葉に、小さく志保は反応する。

「また、繰り返すのか……そう聞いてんだよ。」

「……良く意味が分からんだけど。」

「……え？」

「……じゃあ聞くわ。お前、まさか『逃げられる』と思つてたのか？」

突然の質問に志保は唖然とした。

「もう一度聞く。『逃げられる』……お前は一人から逃げられるか？自分からも、俺からも……だ。また逃げるのか？……そう、運命から逃げようとした時のようだ。」

瞳に僅かな揺るぎも見せずに、新一は志保を見つめた。

「……何言つてるのか、分からぬわね。」

軽く肩をすくめて、志保は歩き去る。つとある。

だが、その足は数歩で止まってしまう。

「……あなたらしくない。」

「え？」

「詰めが甘いのよ。証拠が無いじゃない。証拠が。」

静かに新一は笑い、一步ずつ、歩み寄っていく。

「一つ、俺が志保を好きだという事。証拠は俺自身。一つ、志保が俺を好きだという事。証拠は蘭をおいて戻ってきたその事…」

後ろから、ゆっくりと志保を抱き締めた。

「いや、そのお前の涙にしつくか。」

「…つ…！」

力強く、新一は止めを刺した。

「抱えないで、泣きたい時は泣く、叫びたい時は叫ぶ、それでいいんだよ。志保。それが…人間だから。苦しい事でも…感情に出したい時は、出せばいい。無理する必要なんかない…そう、ずっと耐えられる人間なんていない…けれど、人間はそれを誰かに分かち合える…だから、逃げんじゃないよ。その気持ちから…俺はちゃんと、受け止めるからさ。」

「…あ…」

少しづつ嗚咽が酷くなってきた志保は、ゆっくりと新一の腕を解き、その表情を見る。

「…好きだよ。志保。愛してる。」

その笑顔が眩し過ぎて、塞き止めていた物が全て壊れた。強く、新一の胸へと飛び込んで、力果てるまで叫んだ。

17 紹み合ひ絆（前書き）

タイトル名、実は元ネタがありますが伏せます。完結したら書こうか、書くまいか…

放課後。

いつもの帰り道に、一人の少年が加わった。

「でも、志保ちゃんまで遅刻させるなんて、新一…
「わ、悪かつたつて。ちょっと体調が悪くて…」
「ふん、許さないもんね。」

わざと蘭は頬を膨らませて見せた。

「蘭さん…」

「別に良いけどね 新一、志保ちゃんに迷惑掛けちゃダメよ?
「わーつてるつて…」（……志保の言つた通りだな。）

三人は談笑しながら、帰路についていた。

『…けれど、それでもいざれ…蘭さんに誤魔化せなくなる日が来る
…それは、あなたも分かってるのね?』
『ああ…それは覚悟の上、だからな。』
『全く… でも、ありがと。』

（…数ヶ月か。多分それぐらい続くだろう。蘭に、本当の事を言える日。それはまだすぐは来ない。
…蘭を裏切る事になる。けれど、俺の真意を言わなくちゃ、意味がない。偽りの感情で蘭を守るより、しつかり本当の事を言つた方が良い。けれど、その時はまだ先だ。）

一人の表情が、新一の頭の中を逡巡とする。

笑顔を壊した事があるからこそその不安だった。

探偵として、犯人の周囲の親しい人間を大きく傷付けてしまった回数は両手では数えられないほどよくある。

しかし、それ以上に犯人とその人との間に生まれる溝がある。

それが新一には辛く感じられた。二人の関係に干渉してしまう事が。

だから、一瞬新一にとてもない不安を感じさせた。

「//ヤノシホガウラギラレル」

考え込んでいる新一に、志保が気付く。

「……工藤君？」

続いて、蘭も。

「あれ、どうしたの？新一。」

（つ……）

急いで新一は頭の中から一瞬の不安を焼き消した。だが、志保は小さく笑つて耳打ちする。

（……大丈夫よ。きっと。）

（志保……）

「？」

きよとんとする蘭に、新一は微笑みかけた。

「なんでもねえよ。」

「それじゃあ、蘭さん。私達ここまでだから……」

「うん、またね！新一、志保ちゃん！」

笑顔のままの蘭に、一寸の別れを告げる。

「…志保。」

「大丈夫。言つ時は、一緒に……勝手に言つたら、許さないわよ？」

志保の微笑みにつられて、自分も笑顔になつた。

不安になつてしまふ自分を搔き消して。

（俺が考えすぎてどうすんだって……今日ばかりは立場が逆転しちまつたな。）

ふつと笑つて、扉を開けた。

「分かった。じゃあな。」

「ええ、また明日。」

~~~~~

過ぎ行く時間。

こつして日々が幸せで居られる…少なくとも、来るべき日までは。

志保は笑顔が増えた。蘭と関わる事、女友達といつ存在が志保にとつては嬉しかった。

組織の一員として動かされていた日々が、今なら嘘のようだ感じられる。

そして、彼の言葉が脆い自分自身を支えてくれた。

『抱えないで、泣きたい時は泣く、叫びたい時は叫ぶ…それでいいんだよ。志保。それが…人間だから。苦しい事でも…感情に出したい時は、出せばいい。無理する必要なんかない…そう、ずっと耐えられる人間なんていない…けれど、人間はそれを誰かに分かち合えるだから、逃げんじゃないよ。その気持ちから…俺はちゃんと、受け止めるからさ。』

『…好きだよ。志保。愛してる。』

蘭としても、そして新しい友達が出来た事は嬉しかったし、新一

は言つまでも無く、彼女との関係がとても上手く行くものだと感じられた。

時間は気付けば進み、夏は少しずつ近付いて行く。

一度目に誘つてから約1ヶ月。そろそろ頃合かと思つた蘭は、携帯を開いた。

『T.O 新一

明後日、トロピカルランドに行かない?

返信、待つてゐるね。』

(…やるやうに、言わなきや。)

自分の気持ち。

(やして、聞かなくひや。 )

新一の気持ち。

全てをはつきりさせるとこう事。

けれど、そんな事が出来ればこんな事態にはならなかつただひつ。告白の好機となつたその日は、こんなに上手くいつていた関係が崩れ去るという事は。

そしてその日、絡み合ひ縛が解け、散つて行く。

b  
r  
e  
a  
k

# 壊れる日の朝。

それは、大切な誘いの日。

蘭は決心していた。この日、想いを強く伝えると。

…伝えられさえすれば、断られるだけで済んだ筈だった。

若き者達を振り回す運命は、残酷過ぎて哀しく、堪えられない物。

全てが、壊れる。

)} } } } } } } } } }

プルルル  
...

（起きてるかな……）ふと不安になる。新一が自分の事を忘れてないかが。

トロピカルランドでの「トート。楽しみにしていたこの日を。

（新一…）

ここ数日、数度不安に思つた。彼に何らかの変化が表れるようになつてからだらう。「自分に愛想を尽かしてしまつたのではないが?」という疑問が生まれ始めていた。

今日はまた事件か…それとも…

だが、それは杞憂に終わり、電話の先の相手は反応を見せた。

（あつ……）「良かつた。起きられたんだね。」

『ああ……ま、まあ目覚まし4つ掛けたからな…ふあ。』

少女は頷いて、小さく息を吐いた。

電話先の相手は一度大欠伸してから尋ねた。

『で?待つてれば良いんだ?』

「うん。朝ご飯食べた?」

『一応、な。』

何か歯切れの悪い新一の話し方にはさほど不快感は覚えなかつた。

この時間帯、と言つても9時だが、よくよく考えてみれば毎晩日を越えて推理小説を読み漁つている少年からすれば酷な時間帯であ

る事は確かだ。どうせまだ寝惚けているに違いない、そう蘭は思つた。

（また推理小説…か。新一、らしきにけど。）「じゃ、今から行くね。」

『ああ、じゃあ（工藤君？）つー』

（ん~つー）

『ガチャーンッ

』

叩きつけられた受話器の音が、蘭の左耳をつんざいた。  
(全く…新一！何してんのよいきな…り、……)

何かが、聞こえた気がした。

その瞬間を、もう一度頭の中に描く。

「…」

「じゃ、今から行くね。」

『ああ、じゃあ（工…君…）つー。』

「…」

（……誰の声……？）

『……た…』

『……な……』

その時だった。誰かの声が、携帯から零れ出した。

（え…？）

新一の家の受話器は少し外れているようで、まだ蘭が切っていないので通話が続いている状態だったのだ。

蘭はスピーカーの音量を最大にして、声を聞き取る。

『「めんなさい…電話してたなんて、知らなかつたから。』  
『…いいよ。俺だって、わざわざ朝食作つてもうつて…』  
(つー?)

『……本当、迷惑掛けっぱなしよね。お風呂壊れたからって使わせてもらつて、そのままここで寝込んじゃうなんて……今回ばかりはわざわざ下心を出させひやひやった私が悪かったと反省してゐるわ。』

『あんな……寒そつだつたから抱いて寝ただ

『本当、重症ね。『抱いて寝ただけ』って、誰が聞いても飛びあがると思ひつけど?』

『……すいません。』

『いいわよ。別に……温かかったし。』

(……)

一つ一つの会話が、蘭の耳に入つていいく。

それらが紡ぎ出す答は、すぐそこにあつた。

(あれ……?)

『……良いの?』

『え?』

『分かち合つなんて言つちやつて……あなただって分かるでしょ? 私がどれだけの大罪人かなんて……』

『……』

『たとえどう言おつと、私が犯罪者である事は変わらない。それで

も……』

小五郎の机の上の紙を取つて、蘭は急いで駆け出した。

(そんなん……)

慌てて新一は受話器を置く。

「志保っー。」

「あつ…」

「しまった」とこつ表情で、志保は一歩後ろに下がる。

「まさか…」

「大丈夫。すぐ切った。これぐらい離れてりやあいつだつてそんな簡単に聞き取れないだろ…それより、もう一回掛かってくるかもしれないから、気をつけなきやな。」

「…」めんなさい。本当に。」

志保は、大きく新一の前で頭を下げた。

「『』めんなさい…電話してたなんて、知らなかつたから。」

「…いいよ。俺だつて、わざわざ朝食作つてもらつて…結構美味しかつたぜ？」

「…だつたら、嬉しいけど。」

大きく、志保は息を吐き出した。

「…本当、迷惑掛けっぱなしよね。お風呂壊れたからつて使わせてもらつて、そのままここで寝込んじやうなんて…今回ばかりはわざわざ下心を出させちゃつた私が悪かつたと反省してるわ。」

「あのなあ…寒そうだつたから抱いて寝ただ…」

「…本当、重症ね。『抱いて寝ただけ』つて、誰が聞いても飛びあがると思うけど?」

「…すいません。」

「…いいわよ。別に…温かかったし。」

志保はクスッと笑うと、少し新一が頬を膨らませたのを見て、もう一度笑つた。

けれども、心の底から笑顔にはなれない。

『人間はそれを誰かに分かち合える』

(…そうね。) 「…良いの?」

「え?」

「分かち合つなんて言つちやつて…あなただつて分かるでしょう? 私がどれだけの大罪人かなんて…」

「…」

「たとえどう言おうと、私が犯罪者である事は変わらない……不本意  
だろうと、私は人を殺してしまったのだから……それでも……あ  
つ、」

思わず志保は声をあげる。

新一の手が腰の周りに綺麗に回されていた。

「バーロオ。だつたら もう十分償えてるよ。」

「え……」

「お前が居るから、何度も助けられたんだぜ? 江戸川コナンの時は  
……それで、人の為になつてる。てか、俺はもう十分だと思つてる  
けどな。もしお前が全然償い足りないと思つてるなら……ずっと支え  
てくれよ。ずっと……」

「工藤、君。」

良くそんな臭い台詞がそう簡単にべらべらとその舌から出て来る物  
だと思う余裕も無く、志保は一気に新一に引き寄せられる。

「……大丈夫。お前は」「もう生きている価値なんて……無いんだ  
から。」

一瞬で、時間が壊れた。  
志保の唇と新一の唇が、重なり合うその目の前で止まっている。  
そして…その後ろには、一人の少女が立っていた。  
右の拳は強く握り締められている。

「蘭…？」

「おはよう二人とも…いいえ、朝っぱらから」苦勞様 見苦しい

から離れてよ。」

一気に間合いを詰めて、蘭は志保を突き飛ばした。

「おい、蘭ーどうこい！」

「待つてて。私は志保ちゃんと話がしたいの……全部知ったわ。志保ちゃん。」

「つ……」

「……富野志保。一時期幼児化して偽名、灰原哀。そうよね？人を殺する薬『APT-X 4869』を開発し、更にその予期せぬ副作用とやらで新一を幼児化させ、それを知つて自分も幼児化し、新一に取り入つてまんまと心を奪い取つて……再び新たな計画を始めようとしてる、大犯罪者。」

「なつ……！」

静かに蘭は笑みを浮かべる。

志保の震えが止まらなくなつた。

「それであつてたわよねー……志保ちゃん。」

やり直すといつ事。

それはきっと可能だ。

たとえ壊されたとしても、何度もやり直せる。

けれど、もう元には戻せない。

大切な存在は…儚く消えるだけ。

全てが、零へと還る。

~~~~~

「おー、蘭！」

新一が、蘭に掴みかかった。

「どうこう事だよ…志保がそんな事、するはず無いだろー? APT X 4869? そもそも何の話だよ一体」

「誤魔化さないでよ。」

冷たい声が、放たれた。

「 そうやって…また誤魔化すの?…もう知ってるの。新一が「ナン君だつたつて事。」

（つーつまさ…か…）「まはつ、何言つて…あ…」

蘭は、新一に一枚の紙を差し出した。

びつしりと文字が羅列されている。それは、事細かに書かれた『黒の組織騒動』に関する全てのデータだつた。

「 お父さんが書いてた…まあ簡易的な調査書。机の上に置かれてたから…中身見たけど、ここに書いてあるのは確かに全て辻褄があつてゐる。だから許せなかつた…私は許せなかつたの。」

一粒涙を零して、ぐつと志保の方向を睨みつけた。

「 志保ちゃんが…! そんな組織のメンバーで…! 新一の事を傷つけて…それに各地で色々な事件を引き起こしてたなんて事が…!」

零れる涙を拭いながら、蘭は叫ぶ。

「 そして…また、新一を巻き込んで 利用してとんでもない事をし

よつとしてる……そんなの……そんなの 絶対にさせない……

「…志保…？」

そして、新一はその紙を見て愕然とする。

自分が話していない筈の、志保についての記述が事細かにされていた事に。

「……ごめんなさいね。工藤君。私から今回の一件の事は、詳細に話したの……全部真相を明らかにしないといけなかつたから。それに……あなたは気付いてなかつたと思うけど、毛利探偵も実は大切な事に一つ……気がついてたのよね。」「え……」

小さく、志保は自嘲気味に笑う。

「私の存在。そう、あなたがあのホテル内の事件の時に……一人の女性を逃がそうとしていた事。」「！」

そして、蘭は頷いた。

「……そこに書いてある通り、志保ちゃんは……いえ、あの殺人魔はもう一度それを繰り返す」「ふざけんなっ！！」

壁に拳を打ちつけ、怒りに震えた表情で蘭を睨みつける。

「志保が……嘘、だろ……？何を……何を根拠にこんな事が……」

「私の供述よ。全部……」

「ぞけんなよ……」こんなのは出鱈田だ…… そうだろ…？お前が…本

「…もう一度そんな事をしてみたかったんだな…。」志保

「歩、歩と新一は志保に歩み寄る。

「…嘘、だよ…な?」

「…」

「嘘じゃないわ。全て本当よ。」

蘭の一言で、新一は反応すら叶わず、もう一步、歩と志保に近付く。

「…志保。無理すんなよ…。本心を…お前の

「…」めぐなこね。」

「志、保…？」

「ごめんなさい……こうなる事、わかつてて。知らぬ間に私はあなたの事を…騙していたのかもしれない。」

思わず、蘭も目を一瞬だけ疑つた。

強く、志保の平手が新一の頬に打ちつけられた瞬間。

「彼女が自ら知る、その可能性だつてある……そんな事とつぐに分かつてた。そして、その真相を知つたら…絶対許してくれはしない事だつて。」

「違う。それは…蘭は…」

「…もういいのよ。十分、私は満たされたから。」

「なつ…」

「あなたの言う通り、人はそういう辛さだつて分かち合えるんでしょうね。けれど、これが私の本心…いいえ、これが私という存在…たとえ、そこに書いてある事が眞実でなかつたとしても…近い内に眞実になる可能性は高いわ。残党に脅されたら、それで終わりだし、心変わりして私自ら動くかもしれないわ。そうしたらあなたを巻き込んでしまうかもしれないわね。」

「け、れ…」

「でも、そんのはどうだつていい 大事のは、私にそんな権利は無いという事…彼女に口出しする権利は無い。少なくとも私には。そう、あなたを巻き込んでしまつた私には…だから…だから、大切にして。今のあなたが私を忘れられなかつたとしても、あなたはまた変わつていく。だから心配しないで。もし、あなたが私を忘れられなかつたとしても…その時間は、私にとつての幸せだから…」

「違う…!…そんなの…」

「…言つと思つた。けれど、もう無駄よ…恐らく、そこに書かれ

ている事が、警察側の私への認識。結局、危険なのは私は。幾らどんなに光を浴びたとしても、闇の側面ははがされない…私は薬物作つて人殺しただけじゃない。実際に実弾で人を何度も撃ち殺して。自分を守る為以外の目的でもね。命令されれば、なんだつてした…その罪は決して消せない…絶対に残る。あなたがもし、その罪を許してくれるなら…私はそれだけで嬉しいから。」

「…つ…」

「好きだったわ、私も。あなたと一緒に居られた時間が幸せで、夢のようだった…ありがとう。」上藤君。「

小さく、彼女らしい笑顔を浮かべて、一步一歩志保は歩き出した。

いつものように靴を履いて、扉を開く。

「おー、志くそつ、離せよ！蘭！」

ぎゅっと新一の腕を掴んで、蘭は首を横に振った。

「くそつ…おー、志保ーー！」

呼びかけに応じないまま志保は扉を出た。そして、ゆっくりとドアは閉まって行く。

(…良いのよ。工藤君。)

テープで聞いた、最後の頬り処。

母親、そして皆がずっと待ち続いているその場所。

（…私は黒に戻る。けれど、白の世界で見た物、感じた物…そして貴方だけは絶対に忘れないわ。だから…もう気にしないで。本当に…本当に、ありがとう。）

涙を袖で拭き取つて、志保は歩き出した。

(…全て、元に戻る… これで… よつやく…)

(さよなら、愛しい人…)

大切な存在の姿を思い出しながら、ゆっくりと志保は歩き出す。

「……」

-1 好きな女の子の子の気持ちなんて…推理できないんでしょ？

「蘭つ……てめえつ…」

新一が蘭の首根つに手を掛ける。

「どうこう事だよ…？お前…自分が何したか分かつてんのかよ…？」

「こつもの冷静さは、もう欠片も新一には残されていなかつた。そのまま新一は強く蘭を壁に押しやる。

「あやつ…」

「どうこう…何であんな事を言つた…？志保が…お前、分かつてんのかよ…？どれだけ志保が頑張つてきたか…光を手に入れる為に、そしてようやく…ようやく手にした光を…なんでわざわざ闇に戻すんだよ…？」

「志保ちゃんの気持ちなんて分かるわけないじゃない…？」

「なつ…ぐつ…」

蘭が、新一の腕を払い除け、へたり込んだ。

「気持ちなんて関係ない…危ないんだよ…？志保ちゃんは。新一の傍になんて…置いとける、居らせられるわけ…無いじゃない。」「ふざけんな！ 絶対に志保はそんな事はしない。絶対に

「どうして？どうして絶対なんて…」

「決まつてんだろ。ずっとあいつを見て來た…江戸川コナンとして、そして工藤新一として…誰よりも俺が分か

「

「やつだよね。」

冷たい声が、新一の叫びを止めた。

「やつだよね。やつだよね。新一はコナン君の時の間、哀ちゃんとは深く関わりあつたものね。じゃあ新一。何で何も教えてくれなかつたの？」

「それは

「『蘭を危険な目に遭わせたくなかったから』なんて言つの？…ふざけないで。新一は戻つてからも何も教えてくれなかつたじゃない。」

「…………ら、ん。」

「……つまり、新一は志保ちゃんが好きだつたから、私にそれを言つたらどうなるか不安で隠してた…そういう事でしょ？…じゃあ確信を持つて言つわ。絶対に新一は志保ちゃんに騙されてる。彼女に振り回されてるの。」

「…どうして、そんな事が…」

新一は小さく俯いたが、蘭はその新一を真正面から優しく抱き締めた。

「 答えは新一が言つた通りよ。好きな女の子の気持ちなんて…推理できないんでしょ？」

「 つ…」

「 新一が志保ちゃんの真意を掴んでると思つてゐるなら 心の闇を正確に読み取つたと思つてゐるなら。それは彼女の思う壺…偽物の好きといつ感情を新一に植え付けてたのよ。まあ志保ちゃんが新一を好きだつたつていうのが本当だとすれば…そこから言える事は、志保ちゃんは新一を騙そうとしてた。そして、計画をいつか実行しようとしてる…そういう事、よね？」

ぎゅっと新一は唇を噛み締めた。

「 ……何が言いたい？」

「 だから、志保ちゃんはずつとあなたを騙そうとしてたつて事。そして未だに新一は騙されてる。本当は好きだなんて思つてないのに、そう思わせられてる。」

「 ちが、つ、ちが…」

「 違う訳無いわ。もう一度言つけど、もしも好きだつたなら新一は志保ちゃんの気持ちなんか読み取れない。私が良い例じゃない。」

そして、優しく蘭は新一に微笑みかけた。

「 ……大丈夫だよ。まだそう思えなくとも、必ず少しずつそう思えるから……大丈夫。迷つても、私の傍に居て。今度は、ちゃんと新一の事を理解出来るから…迷つてたんだよね？コナン君としていた間…抛り所の無い世界に。だから哀ちゃんに無理矢理引き寄せられるよつに近付いた……今回は大丈夫だよ。絶対に放さないから、ね。」

ゆうくじと蘭は新一の顔を上げると、もう一度微笑み「また、今度トロピカルランで行こうね。」と残して、部屋を後にした。

「さあ、一緒に語呂をね。新一。」

(くわう…)

新一はゆっくりと床に座り込んだ。

「…なんで、なんでだよ。お前はどうして…」

『蘭』も。『志保』も。

一人の思いもしない異変。

けれど、結局は自分が気付く事は出来なかつた。
二人がどんな感情を抱えているか…隠されたその真意に。

蘭は、徐々に暴走し始めてるという事は新一にも分かった。

けれど、言い返せない。なぜならば、自分は何も彼女に自分は伝えなかつた。いや、伝えようとなかつた。

…頼られなかつた事の辛さ。それを彼女は志保への怒りへと置き換えてしまつていた。

自分のせいでの、彼女が暴走している…だから、何も言い返せなかつた。

そして。

（あいつの気持ち…分かつてたつもりで、全然わかつてなかつたのか…）

『自分は志保が好き』

ただそれだけで良かつたと思つてた自分。

けれど、結局志保の事は何も分かつてはいなかつたのか？

彼女が好きだつたけれども、結局それは虚構だつたのか？
どんなに本物だつたと信じても、それは無駄だつたのか？やはり偽物だつたのか？

自分自身のせい。そして、もはや今更どうでもない。
志保は姿を消し、蘭は少しづつ壊れていく。

「へんう…

拳骨を壁に叩きつけた。

緋色の液体がゆっくつと滲み出た。

- 2 もう何処にも行かないでね？

所詮、私は犯罪者じゃない。

夢を見たかった。彼の隣に居続けるという夢を。ただ、それだけだった。

不可能に決まってる。

彼が私を好きだったから?
私が彼を好きだったから?

関係ない。

江戸川コナンと灰原哀として存在した時間は所詮偽りの時間だったから。

あの時間が存在しなければ……私は余計な夢を見ずに済んだのに。

『…好きだよ。志保。愛してる。』

彼はそう言つたけれど。

今はそれを彼女に言つて欲しい。

人の心なんて自然と移り変わっていく物だから。あなたならきっと、
彼女を愛せるようになる。

もし、あなたが今…まだ私の事を好きなら。
それはとても嬉しいけど。

もう…お願いだから。
早く、忘れて欲しい。

用意された世界。
私は黒に戻る。

『辛くなつたら.....戻つてきなさい。』

お母さんが用意してくれた、幸せな世界へ
どうなろうとこの世界に生き続けられる、それだけでいい。幸せ

な世界へ。

「おはよ、新一。」

新一が出てくるのを家の前で待つ、毛利蘭。

唯一違うのは、珍しく彼女がインター ホンを全く鳴らさなかつた事ぐらいか。

「……」

「も～…新一。」

不気味な笑みを浮かべて、蘭は新一の右手に体を絡めた。

そして、何の悪びれもなく冷静に言い放つ

「新一。そんな姿見せたら……志保ちゃんも泣いちゃうよ?」

「つ……」

歯を食い縛つて蘭を睨むが、きょとんとして笑顔を振り撒き続ける少女を見て、諦めて大きく息を吐いた。

小五郎はあの日 志保が去った日から、探偵事務所に一度も帰つて来ない。家に一度連絡を入れたきりだ。どうやらこの件に彼なりに思う所があつたらしく、何かを調べてる途中だそうだ。

園子はどうやら高熱を出したらしく、口にじばらくは休むんだとか。

「けど、私は新一が傍にさえいれば大丈夫だから…新一ももう何処にも行かないでね?」

「……」

寄り添い続ける蘭からは目を逸らして、新一は前を見る。

（俺は……）

一体どれだけの人間を巻き込んでしまったのだろうか。

周囲から響く、寄り添い合う二人への野次を流しながら歩いた。
違つ心を抱えながら。

-3 最後に残された楽園-

「…………」

志保が電車を乗り継いで来た場所。
それは町外れの、別荘地。

（…黒の楽園。）

至つて普通の緑の広がる世界から、志保は無理矢理に黒を感じ取ろうとしていた。

それが自分の運命なのだとと思い込みながら。

志保は胸に手をやつて、心を落ち着ける。

随分と鼓動が激しい。

（…進む。）

そして、田の前にあるインターホンを

（私にとつての…一番の幸せの世界。）

ゆっくりと押した。

「……」

全く反応を感じない。だが、代わりに別の事実に気付く。

(扉が……開いてる?)

静かに門を開き、扉の取っ手に手を掛けた。

(まさか)

ガチャ…

「え……」
「あり……」

志保は田が点になる。

そもそものはず、田の前の女性は…

「良かったわ。志保、最後に会えて……ふふっ、これでよしやく…

…

静かに笑みを浮かべて、その女性は田の前から姿を消した。美しい幻影の姿が、志保の視界からゆらりと消えて、散った。

「あとは……頼んだわよ。」

最後の言葉は、頭に響いた。

『あなたが、皆が幸せになれる最高の選択を……見守ってるわ。』

「嘘……バカ……つ、つ…」

熱くなる田尻。

「お姉ちやんっ…………！」

止まらない涙。それを拭いながら志保は立ち上がり、隣の部屋へと歩みを進める。

（やつぱつ……）

その先に、自分が思つものがあつたので。

「みん、な……」

家族全員……遠い世界へと旅立つた者の姿が、綺麗な縁の中に飾られていた。

ここが宮野家の別荘。

「名田上」交通事故で失った両親。
ジンに殺害された姉。

姿すら見たことがない祖父、祖母…

（だから…何よ。）

けれど、志保は手を強く握り締める。

（私には関係ない…ここは黒の世界。組織が掌握してる場所。どうせ直に嗅ぎ付けられて…）

「お姉ちゃん？」

それは無駄に斬新な響きで

それは自分が大切な人に掛けていた言葉で

それは後ろからの甘い誘いで

それは、小さな『灰原哀』という存在に限りなく近い姿から放た

れた言葉。

「お姉ちゃん……な、の？」

夢心地に包まれる。妹なのかと。

願望。

守りたい

愛したい

抱き締めたい

償いたい

疑問。

どうしてそこに？

灰原哀？

自分？

夢？幻？

時間。

春の終わり。

午後。

夕陽が近付く。

少女がそこにいるのは、事実。

そう物理的に信じたくなつて、志保は強く抱き締めた。

「お姉ちゃん なの……？」

志保は確信する。

「大丈夫つ……もつ、もつつ……何処にも行かない、からつ……」

この少女を守り続ける事。

それが自分の生き甲斐。自分の幸せ。

（最後に残された楽園に住まつ……私の、運命……！）

そう自分に言い聞かせながら、志保は強く小さな子を抱き締めた。
守るべき物がそこにある。それだけで、彼女は生きる価値を編み出せた。

全ての感謝は、姉と 大切な人に捧げた。

（もうつ…『私は大丈夫だから』……つ…）

-4 なんで？

あれから、ずっとその席は空白のまま。

落ち込んだままの新一の、一いつ後の席が空いている。

そして、勿論隣の席も…

「園子、この前お見舞いに行つたら居なくて…何か知つてる？新一。」

「

「…しらねえ。」

「そつか…」

歯軋りする新一。

彼女までも、自分が巻き込んだといつ事だ。恐らく、今の蘭の姿を見て、相当ショックを受けたに違いない。

「…新一。大丈夫？」

「…具合はどうとも悪くねえよ。」

「そう？元気なさそうだけど…」

確信犯なのは言つまでも無いが。

「元気出して。新一。」

「……」

「落ち込んでる新一なんて、似合わないよ…ね？」

首を振つて、新一は机に突つ伏した。

(俺は……)

高校生探偵が人間として味わった事のない苦悩。
味わった事のない、人間関係の連鎖。

(俺は……どうしたら……)

~~~~~

同じ車両に人は誰も居ない。

やる気になれば、彼女なら執事に頼んで一気に捜索しても「うつ事は十分可能だつた筈だ。

いや、そもそも行方不明の届出を出せばそれで済むだらう。

けれど、彼女は譲らなかつた。伝えなくちゃいけない、大切なことの為に彼女は自らの足で絞り込んだ範囲で捜索を続けた。誰にも行き先は告げなかつた。

（…もう、いやだよ…）

影から見てしまった。志保が走つて飛び出した所も、蘭が妖艶な笑みを浮かべて落ち着いた様子で事務所へと戻つていつたのも、中を覗き込めば新一が絶望した表情をしているのも。

（あんなの…もう見たくない…）

こんな壊れた毎日を過ごしたくないから 園子は動き出した。壊れた蘭、絶望する新一から逃げ出した。会いたくなかった。

けれど、逃げながらでも前には進む。  
自分が一番知らない、彼女の真意を知る為に、園子は電車を降りた。

(面識もえ…)

~~~~~

西野田奈。

それがこの子に付けられた名前だった。

名田上、交通事故で死んだといつ事になつていい両親。

ただ、この子はこいつだった。「去年まで、お母さんもお父さんも居たのに、ある日女人の人�이来て、お姉ちゃんが帰つてから次の日にお父さんが居なくなつて、その次の日にお母さんが居なくなつた」と。

「…哀しそうな田をしてた」と。

年齢は6。

すると、こうこうの仮説が成り立つだろ。

お父さんもお母さんも名田上は交通事故で死んだとなつていたが、何らかの方法で難を逃れてこの地までやつてきた。

そして、この地で過ぐして数年田に、お母さんはこの田奈とこう子を産んだ。

しかし、その女人…恐らく、お姉ちゃんから組織側こうこを嗅ぎ付けられたことを知り、上手く情報操作をして脱出し、今は行方不明である。

「…田奈ちゃん？」
「なあに?」

まさか…

「…一人で、ここに住んでるの?」
「ううん。毎日、お兄さんが来るの。」
「…お兄さん?」
「うん。でね、朝ご飯と夕ご飯を作ってくれるんだよ。お昼も置いてってくれるし、家事も手伝いながらやり方を教えてくれるの。」

6歳にしては、随分と物分りの良い子ね…まあそれは良いとして。お兄さん…?

『ピンポーン』

「あ、来たみたい。」

「え？ あ、田奈。走っちゃ…」

「へーきへーき…『ピンポーン』はーい！」

『ガチャ』

「秀一お兄さん～！」

「来たぞ…元氣か？」

「うん！勿論！」

「良い子だ。良い子だ…大分元氣になつて…ん。」

……え。

『赤井秀一』

……嘘。

「どう、どうしたの？」

「いや……」

なんで？

- 5 また私は後になつてから気付いた

「……え。」

FBI捜査官。志保の記憶は、そう伝えていた。だが、志保が知っている赤井秀一はそこまでの存在。ただ、コナンに協力していたFBI捜査官だという事。

そして、田の前に映る『姿』の記憶は、諸星大。組織に潜入していた…ライという男。

「…どうしたの？志保お姉ちゃん…」

「……いえ、ちょっと…」

「……田奈。今日は自分で昼ご飯、作つてみるか？」

「え？…うーん、大丈夫かなあ？」

「なんでもいいさ。ゆっくりキッチンで色んな食べ物を探して、自分で考えて、作つてみればいい。」

「うーん…分かった。やつてみるね。」

そう言うと嬉しそうに田奈は駆け出す。

その様子を、優しく赤井は見守つていた。

「…ねえ、ライ」

「もうライではない。赤井秀一…それが俺の

「知つてゐる。全部…聞いたもの。」

赤井は、一瞬も志保とは視線を合わせなかつた。

「知つてたの……？」

「……」

「お姉ちゃんの事……何処まで知つてたの……？」

「……死んだという事までは。」

「つ……」

ゆつくりと、壁に赤井はもたれかかつた。

「……成り行きは知つてるか？」

「ええ……あなたはFBIの潜入捜査員……私のお姉ちゃんと関わりを持つて、組織内を巧みにのし上がつていった……けれど、あなた達のお仲間の失敗で、とうとうライアという存在は抹消されてしまった……そつだつたかしら？」

「……ああ……それからしばらく動いてたんだがな……CIAのメンバーと協力を結ぶ際に、結局赤井秀一は表舞台からは姿を消す必要が出てな……一応、血糊を用いた仕掛けで死んだ事を偽装し……姿を隠していた。この場所は……あいつに紹介された場所でな。追伸に残されていた……メッセージだつた。」

小さく、志保は笑つた。

「そう……だからかしら。」「え……」

「私はここをお母さんに紹介された…けれどさつき、お姉ちゃんが見えた…そんな気がしたの。そうよね…あなたがここに来てたんだもの。」

「……」

「…お姉ちゃんは嬉しそうだった。あなたの事を、相当…想つてた。私にでさえ分かるんだから、絶対…」

沈黙し続ける赤井だつたが、気付いていた。

志保の瞳から、『彼女のような』涙が零れ始めてた事に。

「…私は後になつてから知らされた、気付いた。お姉ちゃんが死んだ事につ…びつして、びつして…」

「…志保。」

「…もうつ…なん、で…みん、なつ…後、になつ、あ、つ…てからつ…気付くのよ…あつ…つ…ああつ…」

言葉は嗚咽にしかならず、なんと詫びつとしても全て静かに沈んでいく。

堪えようとしても、流れる自分の感情は止まる事を知らない。

『また私は後になつてから気付いた』

「…」め、んな…さい。」

少しづつ、その感情が止まってきた頃合いで、彼女は謝罪の言葉を口にする。

「……俺のせいだ 謝っても、到底償いきれるものじゃない事ぐらい 分かつて。すまなかつた。」

「…………」

「彼女を……蛇の道に更に引き摺りこんでしまつたのは……俺だからな。

「…………」

「……志保？」

言おうか、言うまいか。

それだけが、志保の頭の中を支配していた。

「言えない。」

答は自然と生み出された。彼を絡ませる訳にはいかない。もう既に自分で出した答を、他人に覆してもらつなど、絶対にしてはいけない行為。

『工藤新一と決別する』という自らが出した結論に、彼を絡ませて変えてもらうなど、そんな事は間違つても許されない。

『また、後からさう気付いた』から 罪は必ず……自分に戻つてくるという事。嫌というほど味あわされた彼女には、それは良く分かつていた。

「…………良いにおこじやない？」

「ん」

「ほら……もう出来かけるみたいだけ。」

志保は涙を素早く拭い、作り笑顔でその方向を向いた。

「出来たっ！」

「おつ……」

「あら……」

少女は笑顔で、料理の大皿を持って来ようとする。

「手伝つた方が良いかしら？」

「…そうだな。」

その作り笑顔に哀しさを感じた赤井も、自分が関わる範囲でない事を悟つて、少しだけ笑顔を返した。

- 6 絶対にあの大馬鹿野郎が連れ戻す（前書き）

タイトル革命…？

「 - 」シリーズはお気づきの方もいらっしゃると思いますが口説で統一しています。

- 6 絶対にあの大馬鹿野郎が連れ戻す

「それで…」

「あなたはもう良いわ。私、今日からこの子の面倒見るから…そもそも、富野家の子供なんだし、それで良いでしょ？」

「…お前…」

「気にしないで。それに…仕事仲間が待ってるでしょ？復帰したら

？」

「…」

赤井は志保の手を握り返したが、その前に彼女はそれを振り払う。

聞き辛そうに、少女が質問した。

「えつと…ビーカな？」

その言葉に反応した一人は、すぐに笑顔になつて、答える。

「…ええ、凄く美味しいわよ。」

「ああ、良く出来たな。」

「そつか…良かつたあ…」

笑顔を振りまく少女を見て、志保はふと思つ。

(…私、こんな風に笑つてた？)

まるで、灰原哀を鏡に映したような姿。

けれど、思考も感情も全然違う。そして、こんな笑顔を、自分が人に見せた覚えが無い。

（私は……そう、私はこの笑顔を守る……それが私の使命……）

自分を重ねたその少女の笑顔を、ずっと守り続ける事。それを、自分の生き甲斐へと変えようとしていた。

それが、一番楽に生きられると思つたから。

「ねえ……えつと、志保…お姉ちゃん？」

「え？」

「外に…誰か、居るみたいだけど…」

（…？）

「…あ…」

~~~~~

彼女はその家の前で立ち止まる。

(綺麗……本当に……)

その家に似合つ言葉は「樂園」。優しさに包まれた場所。

「……」

勿論の如く園子に見覚えは全くなかった。そもそもこの土地に来たこと自体が始めてだった。

なのに、その家は何処か懐かしく……不思議な雰囲気を醸し出す世界。

自分はこの場所の何かを知っている……そんな感覚を園子は味わった。

(…まさか、とはおもひつけど……)

小さなネームプレート。

そこに聞いた事の無い名前に反し、明らかに彼女を指し示す名字が刻まれていた。

(富野……田奈？え……まさか……！)

富野といつ名字。自分の探し求めてた場所。

(……居る？居るの……？)

震える右手せめやつくりとインターホンへと伸ばされ行く。

（アハ、アハ、震るかも、しれな……い……）

『ズキッ

（んつ……）

触れない。伸ばした手で、最後のボタンが押せない。

（ダメ、私じゃ……また、志保ちゃんが……）

たとえ一瞬志保が居たとして、自分に何が言えるだらう。

園子はゆっくりと手を離した。

逃げ出そうとしてゐる自分の弱さが悔しくなる。結局、自分には何も出来ない事。

（私は……）

所詮、自分は部外者でしかない。その自分に、再び一人を繋ぐ事が出来る気がしなかつた。

（どうしたらい……良いのよつ…）

園子は、その場に座り込んで、涙を零して動かなくなつた。

だがその時 前方から少し低くなつた 待ち望んでいた声が聞こえてくる。

「…鈴木さん？」

「…鈴木…さん…？」

園子は、ゆっくりと立ち上がりつた。

「はは、やだ、な……『ひつひ……」

「……あなた!」『わざわざ向をつて……』

『わゆつと顔を噛み締める。

許せない。今更彼女がそんな事を言つ事が。

逃げ出した彼女への怒りが、強くなつた。

「……ふざけないでよ。」

「え……」

「あなた……あなたじやなこのー? 蘭をあんなにしたのは……ねえー……」

「……」  
「教えてよ……『ひつひーーひつひー』蘭はああなつちやつたのよー? あなたは……『ひつひー』何も解決しないで逃げ出したのー? 『ひつひー』

「」

「」

胸に手を当て、苦しみ出す志保。

「面野、れど……」

「……『めんなれ』。けれど、私はそれしか言えない……私に言える事なんてないのよ……」

息を切らしながら、志保は壁にもたれかかる。その痛々しそうな姿が、園子に田に焼きついた。

「……言つ資格なんか……ないから。」

「…………分かつた。」

「え……？」

園子は振り向いて、一言残す。

「勘違いしないでよ。あなたは……絶対にあの大馬鹿野郎が連れ戻すから。」

「……」

「あなたが何も分かつてない事を証明するのは私じゃないわ。全責任、あいつにあるつてわかつたから。」

鋭い眼光で、志保を睨んだ。

「あなたの言う資格なんてもの 存在しないんだから。」

7  
一人の人間、工藤新一として

『やぶうなら 今までありがとうございました。 宮野志保』

その机の上に残されていた言葉はそれだけだった。  
それから一週間、その扉は開いていない。

(... うへへ、なごのね ...)

荒らされた部屋。常に綺麗に整えられていた彼女の自室も、慌てて飛び出していつた為か乱雑に物が転がり落ちていた。

（……結局、わしらじや力にはなれんかつた……といふ事か……）

今日、一日何をした？

鏡を見て、自分の姿を見つめなおす。

いたつていつもと変わる事はない。強いて言つならば、少し痩せた  
ぐらいか。

学校に居る間、蘭は俺から殆ど視線を外さない。

一度あいつの方を振り向いたら、蘭は本当に無駄に綺麗過ぎる笑顔  
を向けてきやがった。

…俺はどうしたら良いか全然分からぬ。

徐々に、蘭が頭から離れない事に慣れ始めてしまつて居る。だから、俺はふと思つてしまつ もうこのままいいんじゃな  
いかと。

志保は…幸せだらうか。

もしそうなら、もう俺は良いかもしない。アイツが…苦しんでき  
た過去。それを、出会いで振り払えたなら…  
俺から離れても…幸せで居られるとするなら…それはそれで良い  
かもしれない。

もつ 僕は

### 『ピンポン』

…誰か来たのか。

まあ夜7時つたら…もうこの時間帯だと、それに雨の中だったら…部活帰りの蘭…ぐらいだろうな。ははっ、そういうや夕飯食つてなかつたや…バレたらあいつ作るだろうな。で一緒に食べながら、またトロピカルランドに行く相談

…もうそろそろ、限界か…俺も。

俺は…蘭を受け入れる…それが正しいのか…?

「はー…っ！」

~~~~~

雨に降られて、びしょ濡れになつた園子が、門の前には立つていた。

「…新一君。」「園、子。どうした…？」

突然の事に新一も慌てる。高熱で休んでる筈の彼女が突然この家にやつてきたのだから。

「お前、熱あるんだろ？入つて…」

「 良いの。それは……」

グッと握り拳に力を込める。

今すぐここで殴り飛ばしてやりたくなる。
けれど、それを園子は言葉に代えた。

「ねえ……知ってる?」

「……え。」

「今……富野さんが何をしているか。」

「……しらねえ。あいつは俺の事なんかに興味」

「今そういう話じやないの。あなたに聞きたいのは、そりじゃない。あなたはどうして『彼女を追いかけない』の?」

「……だから、俺は」

「まさか、逃げ出すつもり?」

園子は新一を鋭く睨みつけた。

「私を馬鹿にしないでよね。会つて来たんだから、あの子に。それで分かつたわ……あなたのせいよ。こうなつたのは」

「だから、俺のせいで蘭を傷つけちまつてそれで」

「違う。それだけじゃない。あなたは直接『彼女を傷つけた』。

そして今もなお『傷つけている』。」

新一の手先が震える。

「…何してんのよ。」「…」

けれど、それ以上に園子は強く震えていた。
もう我慢できないくらいに。耐えられないくらい強くなつっていく
怒り そして、願い。

『せめて、少しでも元に戻りたい』

「あんた探偵でしょう！？人間関係を素早く読み取つて感情までも
推理して事件の概要を解き明かす探偵なんでしょう！？だったら…
何とかしてみせなさいよ！－！富野さんが何考えてるか」

「つるせえつ…！」

（え…？）

初めてだと、そう園子は気付く。
彼が涙を流した瞬間。

「…俺は…全然分かってやれなかつたつ…あいつの事全然分かっ
て…なくて…情けねえよ…本当…」

「…新一、君…」

「無理なんだよ…探偵には…そう、探偵…には…」

新一は額に手をあてる。
少しだけ熱があった。

(……ああ……そつか……そういう事か……)

数度呼吸を整えると、新一は落ち着いた様子で小さく頷いた。

「あー……もう大丈夫。園子、俺は自分の力で調べるから……あいつに伝言だけ、頼んで良いか?」

「え……」

「今はまだ会えないけれど……必ず戻つてくる。お前の言った意味は確かに正しかつた。高校生探偵工藤新一なんかに、志保の本当の気持ちなんか分かりはしない。けれど俺はそれでも分かつてんだよ。お前の気持ちだって、あいつの気持ちだって……俺は高校生探偵である以前に『一人の人間』なんだから……だから俺は行つて来る。一人の人間、工藤新一として……あいつを取り戻しに……」

園子はその言葉に大きく目を見開いた。

そして新一はドアを開くと、一点に視線を向ける。

「全部終わつたら、ちゃんと本当の事伝えるから……つて伝えてくれ。俺は博士の家で調べ事したら……突き止めにいつからよ。」

「……分かつたわ。けど、見つけられなかつたら承知しないから。」

「わーつてる……」

新一は園子に手を上げると、走つて阿笠邸へと飛び込んで行つた。

「……蘭。」

園子は外に出て、ドアを閉める。
新一が一瞬視線を向けたその場所に、彼女は隠れていた。

「……そつか。」

「……気にしないで。新一君が」

「違うよ。新一は合ってる。」

蘭は確かに頷いた。

「私可笑しかった……新一がまた離れちゃうのが怖くて……少しでもと
めようとしてたけど。でも私気付いてた……新一の気持ちは変わり
つこなかつた。」

「蘭……」

「そうだよね……私、何してたんだろ……」

「……」

空を見上げる。

けれど、何かが瞳を覆ってるせいか星は全てボヤけて見えていた。

「馬鹿だなあ……ほんとつ……あいつも、私も……」

（）（）（）（）（）

スーツ姿の男は扉の前に立っていた。

（）（）（）

『……一体その薬が何処で作られたのか……何とか探つてみてくれ。もしかすると……これは大変な事態かもしれん……これは毛利君。君と私だけの秘密だからな……』

日暮警部の依頼。

『まさか……あの女の子が……』
自分の推測。

（……）
（……）
（……）

時刻は9時。もし……ここに住んでいようとすれば、帰つていて可笑しくはない時間だらう。

『ピンポン……』

（反応が…ない？どうこう事だ…？）

「つー毛利探偵…？」

小五郎はその声の主の方向を振り向いた。

「……お前か。」

「あの… 一体…？」

「フン、邪魔するんじゃないぞ…今この家に居る筈の… 富野志保つ
ちゅう…」

（え…！？）「ちよつと 話を聞いても良いですか？」

「あ？」

息を整えて、新一は問を持ちかけた。

「…まず、前も言いましたが知つてますよね？僕があのホテルから
脱出した方法…」

「ああ…… A P T X 4 8 6 9 とかいう薬の解毒剤の効果が切れて…
お前の仮の姿の江戸川コナンに戻った… そう前に説明してたよな？…
それは、コナンが新一に戻る直前の事。」

「はい、その通り ですが…」

- 8 頼つてくれなかつた（前書き）

4話の謎の回想の意味。回想回です。

- 8 頼つてくれなかつた

「……はい。俺は……蘭と一緒に行つたトロピカルランドで黒服の男達の取引現場を目撃して……別の黒服の男に倒され、作った毒薬の副作用で幼児化させられて……それからは、知つてゐる通りです。」
その少年は、大きく頷いた。

12時過ぎ。既に蘭は眠つてゐたが、コナンは小五郎と二人探偵事務所のソファで向かい合つて座つていた。

「……やはりか。」

鈴木財閥のホテルでの爆破騒動。その時に死んだと思われていた新人が上手く脱走できた原因は小五郎の脳内にはどうしても不思議に思えていた。だから、ダストシユートに指紋が残つていたと言われた途端、ふと一つの推論が浮かんだ。

「お前はあるの日……そのホテルに行つていた……だが、博士はもう家に帰したと、そう蘭に言つたらしい。そして、お前は博士の家でゲームしてたらしいが……しかしお前がもし工藤新一ならば。再度あの時幼児化して、ダストシユートから脱出して、あの後用事があると言つてホテルに残つていた博士に引き取られて……一度博士の家に寄つてから、この事務所に戻つてこれたはずだ。違うか？」

「……『』明察。それにしても、酔つてゐるんですか？そこまで分かつて事は知つてゐるんでしょう？僕に麻酔銃を打ち込まれて……代わりに僕が毛利探偵の声を使って推理してたつて。」

「ああ……ま、今は少し酔つてゐるかもな。お陰で随分と頭が良く働いてやがる……」

「……

「……なあ、コナン。どうして…」

彼が普段は殆ど見せないくらいの、真剣な目つきでコナンを見た。
「……どうして、少しでも……頼つて、くれなかつたんだ…？その組織に関してだつて…相談できる事ぐらい…何かあつたんじやないか…？」

長い沈黙を経て、ゆっくりと口を開く。

「…守りたい物が、あつたから…」

「……」

「自分の正体は間違つても口外できなかつた。どうしても守りたい物が…ありましたから。」

「…そうか。」

小さく笑つて、小五郎は立ち上がり、コナンの頭をゆっくりと撫で

た。

「奥へやつたよ……お前はな。本当に……奥へやつてくれた……」
苦労だつたな。コナン。」

その温かさに、コナンの心は落ち着くと同時に、強烈に申し訳なさが
こみ上げていた。

迷惑を掛け過ぎたとこつ事じ。

「……今田までは、お前はコナンだ。そつだらうへ。」

「え……は、はい。そつですけど……」

「だつたら」

小さく咳払いをして、小五郎は続けた。

「蘭の隣で寝てやつてくれ。あいつが寂しがるからな……頼りなかつ
たが父親として最後の頼みだ。」

「毛利探偵……」

「――藤新一じゃなこぞ。江戸川コナンとして……だからな。」

「……はい……」

コナンは思わず瞳に涙を浮かべかけて、それを無かった物にして拭
い去る。

そして、階段を上り始めた。

「……おい、コナン。」

「え？」

「……そうこええ、お前、その、なんだ。解毒剤ってのは、誰が作つた奴なんだ？」

「え？」

「いや……違つ。作つた奴は分かる。あの女の子だろ？……博士の家に住んでこるんだ。そう考えれば自然だ……こや、待てよ。まさかあの女の子も……？」

「つ……」

「あ、いや、済まん。呼び止めて悪かつたな。早く寝りよ。」「う、うん……おや、すみ……」

（…まさか。）

灰原哀。ミステリアスで、コナン同様小学生とは思えない雰囲気を漂わせる少女。

（……あの少女が組織の一員だとしたら……？）

一枚の紙を取り出して、ペンを素早く走らせていく。
危険な組織が彼女から再始動する恐れがある。そう小五郎は勘付
いていた。

この日の夜が、コナンと小五郎が交わした最後の言葉だった。
翌朝はもうコナンには小五郎に言葉を掛ける勇気は無かつた。
小五郎はもう一つの真実に迫ろうとしていたから。

「それじゃあ……あれから志保の事……」

大きく小五郎は息を吐き出した。

「ああ……ずっと嗅ぎ回ったよ。博士の家に住んでる奴だろ……あいつが組織の一員で、お前を幼児化させたAPT-X4869を作った奴だと……」

「……どうするつもりですか？まさか……」

「その女は捕まえて、俺は連れて行く。警部と話し合って、今後どうするかは……」

「待つて下さい……」

「あ？」「

そう答えてから、新一は慌てて言葉を搾り出した。
だが、すぐに止まってしまう。

「それは……でも、まだ……」

「……甘いな。坊主。」「

「……」

当然の答を小五郎はひねり出す。

「当然だろうが。彼女は犯罪組織の一員……それにそんなのが米花町に居て……放つておけるか？」「

「つ……」

その言葉に何も反論できる余地など存在しない。

それが新一を更に苛立たせた。

「……それで、ここにいるんだな？」
「……恐い……」（志保……）

小五郎は、真昼間に外をうろついて園子を尾行してこの場所をかぎつけたが、新一は、この場所を志保の母親の残したテープから発見していた。

『志保。もしも、あなたが困ったひ……（あいつ……やつぱり本当に……）』

「……しかし、反応がないな。灯りはついてるんだが……もしかして、この家じゃないのか？」

『はいっ！』

「え……」

聞いた事もないのに、新一の心には懐かしい感覚が通り抜けていた。

「どうした？聞いた事があるのか……？」
「いえ、違いますけど……」（ん……？）

扉を開いたのは

「はい…」

「えい…？」

灰原哀に酷似した少女だった。

「おい どういう事だ！？」

「毛利探偵！… 彼女は違いますよ。灰原哀じゃない。」

「な…」

小さく微笑んで、新一は屈んでその少女の視線の高さにあわせた。

「 そうだよね… 須野田奈ちゃん。」

その言葉を聞いて、小五郎は慌てて外に引っ掛けられていたネームプレートの文字を見る。

「うん……でも、どうしたの？こんな時間に…」

「え？ とな…… 駄のお姉さん、ここに居ないかな？」

指を額にあてて、「うーん」と声を出すと、寂しそうな顔で首を振った。

「昨日何処かにいっちゃった…今は、私しかいないの…」
「ふーん……この家に住んでるのは、お姉さんと君だけ？」
「うーん、お兄さんが居るんだけど…お兄さんは探しに行っちゃ

た。

「（そうか…あの人…）…そつか。」

「おい、坊主。一体どうなつて…」

新一の頭の中には、もう彼女の行き場所の答は出ていた。

もし行くとしたら一箇所しかない。けれど、間に合つのだらうか？

「…毛利探偵はここで待つてて下さい。必ず戻つてきますから。」

「おい、お前…」

「大丈夫です。あそこしか、無いですから。」

新一には、彼女の姿が見えた気がしていた。

「…田奈ちゃん。」

「え？」

「良い名前だね。お母さんと『お姉ちゃん』にちゃんとお礼を言
うんだぞ？」

「…あ、うん…！」

少女がはつと気づくと、新一は笑顔を見せて駆け出した。

ただ一人、話の流れについていけない男が一人だけ立ち尽くしてい
る中で。

「おい…？」

「えつと、おじさん…中に入る?」

「あ、ああ…」

その時だつた。

「ん…どうかしましたか?」

「え…」

「おや…」

その男は、手提げ袋に食品を多数つめていた。

「秀一お兄さん!お帰り!…タゞ飯買って来たの?」

「ああ、ただいま…」

「おい、あんた…」

「え?」

小五郎は余りにも不自然な事態にはつとした。

「どうしてだ?あの娘を探してんじや…」

「よしよし、田奈。ちゃんと嘘を言えたみたいだな。」

「うん。勿論…あのお兄さんだけなんでしょう?志保お姉ちゃんを元気に出来るのは…」

「…まあ、恐らくな。少なくとも俺らに…」うつむくる話じゃないからな…彼に託すしかないだろ?」

「あーもうつ!頼むから一人つきりの世界に入るんじやねえつ!」

「大丈夫かなあ…本当に。」

「ああ、きつと…な。」

小五郎の叫びなどお構いなしに、一人は頷きあつていた。

~~~~~

月明かりが映し出す自分の影。

少女は怯えていた。  
自分を、彼が探しに来てしまつことを恐れて、石碑の前に蹲つていた。

「見つけた。」

「……」

「確かに綺麗だな……」  
「は。」

少年はその隣にゆっくりと座る。

「……なんで、分かったの？」

新一の方向から顔を背けて、志保は尋ねる。

「逆に聞くけど、俺が来るって知ってたよな？」

「ええ。」

「……こんな綺麗な場所にならきっと立ててある……そう思つたから。お前の大切な場所がある……綺麗な満月に照らされた場所にある、って。」

新一は立ち上がり、一つの石碑の前で深々と頭を下げた。

富野明美と刻まれた、その石碑に。

「……めんな……本当。」

「え……」

「俺のせい……辛い思いさせちまつて……」

「違う……」

志保は後ろから強く新一を抱き締めた。

「それは……それは……」

「志保。」

「私が……逃げ出した……結局、私が……」

「気付いてなかつた。」

「え？」

新一は、小さく笑つて呴いた。

「いや……どうしてこんな事に気付かなかつたんだろ……お前、こう言つたよな?『自分から毛利探偵に真相を話した』つて……」

「ええ。そうよ、私が……」

「まさか。だつたらお前、『あんな事』認めないし『あんな事』しないだろ。」

「あんな……つてつ……」

『……好きだよ。志保。愛してる。』

志保は新一を抱き締めていた両腕を放した。

「あんな事言われて真正面から公園で飛びついで抱きついで大泣きしてた奴が……組織を再生する計画を描く? 有り得ない……志保。お前はただ逃げただけだ。蘭の言葉が恐ろしくなつて、否定しきれなくなつて……逃げ出した。嘘ついて、逃げた……それだけだ。あんな選択してさ。」

「つ……」

新一は志保の方向に振り返ると、志保を自分の胸の中へと導く。

「……でもそれは全て俺のせいだ。蘭にもつと早く……もつと早く真意を伝えるべきだった。それがすべき事だったから……そうすれば、お前も傷付かずに済んだ……本当、『ごめん。』

「…良いの。良いの…それは…」

「俺がずっと傍に居てやればよかつたんだ…お前を追いかけて…俺が、大事な時に傍に居ない事が『志保を傷つける』…そうだよな。蘭の時だつてそうだつた…全然帰つてこない俺のせいで哀しかつてた…何でまた忘れてたんだろ…」

「工藤、君…」

「…『じめん。もう傷つけはしないから。ずっと俺は傍に居る…』だから、もう余計な心配なんかすんじゃねえよ…志保。もつと自分を大切にすればいい…俺の傍に居るのに必要な資格なんてない…どうあつても、俺は絶対に志保の事を守り続ける…からさ。」

大きく志保は溜息をついた。

「人泣かせね、本当…」

「え?」

「『『え?』じゃないわよ。『え?』じゃ……そんな格好つけた台詞言つて…あなた恥ずかしくないの?』

「格好つけた台詞つて…あのなあ。」

「もう良いから…」それ以上は。だから…」

「つー?」

「もう戻るわ。ずっと抱き締めてて……一番落ち着いていられるか

」

「志保っ……てめり……」

「仕返しよ。でも自業自得……」

「んにゅ……」

志保はつっすらと笑顔を浮かべたまま、新一の胸の中で心を落ち着けた。

「……綺麗ね。」

「え?」

「満月。あなたが来て……もっと綺麗に輝き始めたから……哀しか

つた光が、今は凄く温かくて……

「……？」

「あなたが太陽って事よ。私のね……」

「……さつきの言葉、そつくり返して良いのか？」

「え……ひさしつ」

わしき志保がしたよひ、新一は無理矢理、それでも優しく唇を重ねた。

「ちよつと……ひ……

「仕返し。格好つけてんのはお前じやねえかっての……」

「ん~つ……新一……」

「でも、ありがとひ。お前のお陰で……」

「……？」

新一はゆっくりと志保を放した。

「今だから言わせてくれ。コナンとして居た1年間、その意味。」

「……え。」

「俺は変われた。江戸川コナンは……灰原哀と出会った事で。それは工藤新一にとつての存在しない1年間……けれど、それは絶対に『空白』なんかじゃない。『空白』なんかにはならない……大切な事が一杯詰まつた……1年間だつて。」

「……それは、私だつて……」

「『こめん、同じだつたな。』

「ええ……ようやく生きる意味を感じられた。あなた達のお陰で

「……」

「志保……」

「あ、ちょっと待つてて。」「ん？」

志保は新一を放すと、石碑の田の前に立つた。

（お姉ちゃん……ありがとう。大切な人、見つけました。もう……本当に『大丈夫だから』……ね。）

そして、一度大きく礼をする。

「……多分、私…捕まるわよね?幾らFBIの圧力があつても、ここまで件が露見しちゃつたらもつ…ね。」

「……」

「それに、まだまだしなくちゃいけない事は幾らでもある……でももう私は大丈夫よ。そうなるのは覆しようがないけど…大丈夫だから。」

綺麗なその笑顔を、新一に向けた。

「行きましょう…もう逃げない。きっと、あなたがいればどんな事も『大丈夫だから』…ね?」

一応、今回で完結は完結です。

まずは、同じまでお付き合い頂きありがとうございました（――）  
m

このサイトに登録してはや1年が経ちます。今書いてる小説は、最初に書いた小説のリメイクになります。

乱文駄文でとても読めたものじゃなかつた作品でしたが… 今回はそれなりに仕上げられたと思つています。

個人的な話を少々。

この最終回のタイトル、『大丈夫だから』だけは最初から決まつていました。そして、最終回が全てを決着させて終わる物ではないという事も。

まだ一応数回書く予定ですが、それはもう全てが終わつてからです。一人にはその前にまだ苦難が待ち構えています。けれど、それは書きません。一人ならばどんな苦難も絶対に全て乗り越えられる。それを描きたかったんですから。

というのは建前で実はもうこれ以上書いたら話が締まらないというのが理由なんんですけどねwww

ここまで読んで下さつて、本当にありがとうございました（――）  
mこれからもよろしくお願いします m（――） m

次の回まで、一応続きます。

after 名前

「ただいまーっ！」

その元気な声は2階の作業部屋まで響いてきて、調査書にペンを走らせる新一の腕を止めた。  
(おっ、帰つて来たか。)

扉を開いて、新一は階段を駆け下りると、もうそこには既に彼女の姿があった。  
10年の時を経て、すっかり背も伸びて女性らしくなった田奈の姿が。

「もーっ…新一お兄さん、まだ着替えてないの？」  
「ははっ…（しゃあねえだる…）」(ちは徹夜明けなんだから)……  
あれ…お前、志保に開けてもらつたんだる？」  
「え？違つよ…私、自分で鍵開けて入つてきたんだけど…そういうば、お姉ちゃん何処だろ。」

田奈はぐるぐると周囲を見渡すが志保の姿は何処にもない。

「あ、分かつた。」「え？」  
「じゃあ、問題…田奈、今志保は何処に居る？」「え…？」

新一はニヤニヤと笑いながら階段を上がり、「着替えてくるから考えとけ」と残して去つて行つた。

「えーっ……ど、?」  
外に出て田奈は探し始めるが、庭の何処にもその姿を見つける事は出来ない。

「うーん……」  
「あっ、田奈ちゃん!」

その声の主は、田奈の姿を発見するとすぐに駆けて来る。

「あ、歩美ちゃん。あのね、ちょっと…」

「…見つけた、ってな。」  
「はいはい…良く見つけました。」

はしごを伝つて屋根上に上ると、そこに愛しい彼女の姿はあった。

「どうして分かつたの？私、こんな所に上る機会なんて全然ないのに…」

「上つたのは空が綺麗で、鳥達の飛ぶ姿を見て…と勝手に推測してみたけど、まあ上に居るつて分かつたのは少しだけ柱が軋む音が聞こえたからなんだけだな。」

「大正解。流石天才私立探偵は違うわね…」

「何が言ひてえんだよ。」

「褒めたつもりだけだ？」

二人は顔を見合せると、思わず吹き出してしまつ。

「……でも、お前も無茶すんなよ。妊娠して2ヶ月だろ？」

「まだ大丈夫。それに少しばちゃんと私も動いた方が良いのよ……」

「そうそう、名前。」

「え？」

志保は優しく微笑んで新一に問いかけた。

「どうしたい？名前…」

「ああ……まあ何人生まれるかわからねえし…お前のお母さんみたいな事を考えるのはまだ早えつか…」

「え？私の…お母さん？」

せつこえばまだ話してなかつたな、と思つて新一は言つた。

「明美さん、志保、田奈ちゃん……二姉妹で実はあるキーワード埋め込んでんだよ。なんだと思つ？」

「え？ 何かしら……共通点？ 相違点？ ……」「一ん……」

「うこうクイズの方が、志保は苦手だらう そんな事を思いながら、新一は笑いをこらえて考えている志保の横顔を見つめた。

「…………何？」

諦めた様子で、志保は新一の方を見る。

「頭文字。」

「え……あ、し……」

「『明日』。未来を見つめて欲しこつて意味……でお母さんほつけたんだと思つよ。」

よつやく居場所を見つけた田奈は、小さく溜息をついてはしゃぐを上つてきた。

（後で歩美ちゃんに見つけたって連絡しなきや……）「よいじょつと……で、何々？お姉ちゃんの子供の名前？」

「ああ、何か思いつくか？男の子でも、女の子でも……」

「もう、今じゃなくても……（つて、私が切り出したのよね……）」

田奈は少し考へると大きく手を打つて嬉しそうに言った。

「男の子なら藍——女の子だつたら……愛子かなあ？普通過ぐるナビ

…」

「良かつたじやねえか。お前の名前使われまくりだぜ？」

「ちょっと……ふざけないで、田奈。そんなの誰が……あつ…

ふつと志保が空を見上げた。

「どうした？」と新一は尋ね、不思議そりて田奈は顔を覗き込む。

「……い。」

「え？」

新一が彼女を愛したのは、時折みせるそんな笑顔だった。

「美空……どんな事があつても……未来と、空だけは見失つてほしくないから……なんか良いと思わない？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0785w/>

---

空白の1年 想う

2011年11月21日06時52分発行